

## 第8章 総括

### 第1節 轟貝塚を構成する要素

#### (1) 貝層

##### 過去の調査で把握された貝層について

第2章で述べたように、轟貝塚は明治31(1898)年夏頃にはその存在が知られ、大正6(1917)年の鈴木文太郎らによる発掘調査(第1次調査)以降、現在に至るまで計13次に上る発掘調査が行われてきた。貝層については発見の当初から記述がみられ、轟貝塚について最初に報告した佐藤傳藏は、露出する貝殻の厚さは六尺(約180cm)に達し、貝の種類は「かき、あかがい、はまぐり等」がみられるとした(佐藤1899)。ただし、この記述については観察した正確な地点が不明であり、付近に存在する現在の西岡台貝塚について述べたものである可能性も否定できない。

その後の発掘調査のうち、貝層について比較的詳しい記録が残るのは大正8(1919)年の第2次調査、昭和33(1958)年の第5次調査、昭和41(1966)年の第6次調査、そして本書で報告した平成26～28(2014～2016)年度の第12・13次調査である。これら各調査で記録された土層・貝層の対応関係は第4章第57図で示したとおりだが、ここでは各調査の中で貝層がどう捉えられてきたのかを今一度まとめ直し、現在までにどこまでわかったのかを整理したい。

第2次調査を実施した濱田耕作らは、地表から5～7寸(約15～20cm)は耕作土であり、その下に厚さ2尺(約60cm)程度の「密実なる貝殻の層」(=貝層)が堆積するとした(濱田・榊原・清野1920)。また、貝塚全体の広さを「約一町平方」(約109m四方、1ヘクタール)と想定した。報告書に掲載された平面図(第2章第6図)では、台地先端付近の限られた範囲を特に線で囲み、「貝塚 SHELL-MOUND」と記載している点が興味深い。現在、この線で囲まれた範囲に貝層が特に露出する様子はみられないが、約100年前の調査当時、ここが文字通り塚状に高まっていたとみられ、平成15(2003)年度作成の測量図にも等高線の変化からわずかにその痕跡を読み取ることができる。

第5次調査では、最も残りが良いとされたIトレンチの調査結果を基準に、以下のとおり複数の「貝層」が報告されている(松本・富樫1961)。

第2層「純貝層」 厚さ20～25cm。カキが90%を占め、他に赤貝、ハイガイ、ハマグリ、アサリが混じる。土器は阿高式を単独で包含し、他を含まない。これより下層では阿高式の出土は無いとされる。

第3層「混土貝層」 厚さ23～15cm。カキ、赤貝を多く含む。土器はヘラによる直線・曲線文や刺突文を施すもの(この調査を通して設定された轟D式の特徴)が認められる。

第4層「貝層」 厚さ約10cm。貝は大部分がハイガイで、他にカキ、赤貝、ハマグリ等を含む。含む土器は第3層とほぼ同様だが、曾畑式に近いものが一部含まれる。3層と4層の間に一部焼土層が確認されており、4層上面がある時期に生活面だったことが想定される。

これによると、各層の時期は第2層が中期後葉の阿高式期、第3層～4層が前期後葉の轟C・D式期と想定される。

続く第6次調査では、中期と後期に大別される2つの貝層が確認されている(宇土市教育委員会2008)。中期の貝層は、上記の5次調査Iトレンチに近接するDトレンチ等で特に良好に残存する。カキ・ハマグリを主体とし、阿高式を中心とする縄文時代中期の土器を含む。5次調査で第2層「純貝層」と記録されたも

のと同じ貝層とみられる。後期の貝層は、Dトレンチから北西方向に約50mの微高地上に設定されたEトレンチで検出したもので、鐘崎式・北久根山式・市来式等の後期中頃の土器を含む混貝土層の上部に、マテガイ・アゲマキ等を多く含む純貝層が記録されている。

6次調査を指揮した江坂輝彌は概要報告の中で「マガキの多い中期の阿高式土器の時期の純貝層があり、その下の一部に轟式後半の時期のハイガイの多い薄い貝層が認められ」とし、轟式土器を含む前期の貝層の存在も示唆している（江坂 1971）。ただし、調査に伴い作成された土層断面図等の記録資料からは轟式期の貝層と阿高式期の貝層の区別は判然とせず、江坂がいう轟式期の貝層が具体的にはどこに、どの程度の厚さで堆積していたのかは明確ではなかった。

以上が大正期から昭和期の調査で把握された貝層の状況である。まとめると以下のとおりである。

- 1 表面観察による貝層の堆積範囲はおよそ1ヘクタールである。
- 2 貝層は、轟C・D式を含む前期の貝層（ハイガイ主体）、阿高式土器を含む中期の貝層（カキ主体）、鐘崎式・北久根山式・市来式等を含む後期の貝層（マテガイ・アゲマキ主体）の3つが存在する。
- 3 貝層の厚さは全体で60cm程度（20cm×3層程度に細分も可能か）。

ただし、5次調査で報告されている前期の貝層については、ごく近接する調査区を含む6次調査で明確に示されていないこともあって、その実態は曖昧なものであった。そのため、特に宇土市で実施した6次調査の再整理報告書刊行後は、轟貝塚における貝層形成の確実な上限を中期・阿高式期に求めざるを得ず、前期・轟式期の貝層が存在するか否かは検討課題として残されていた（宇土市教育委員会 2008）。

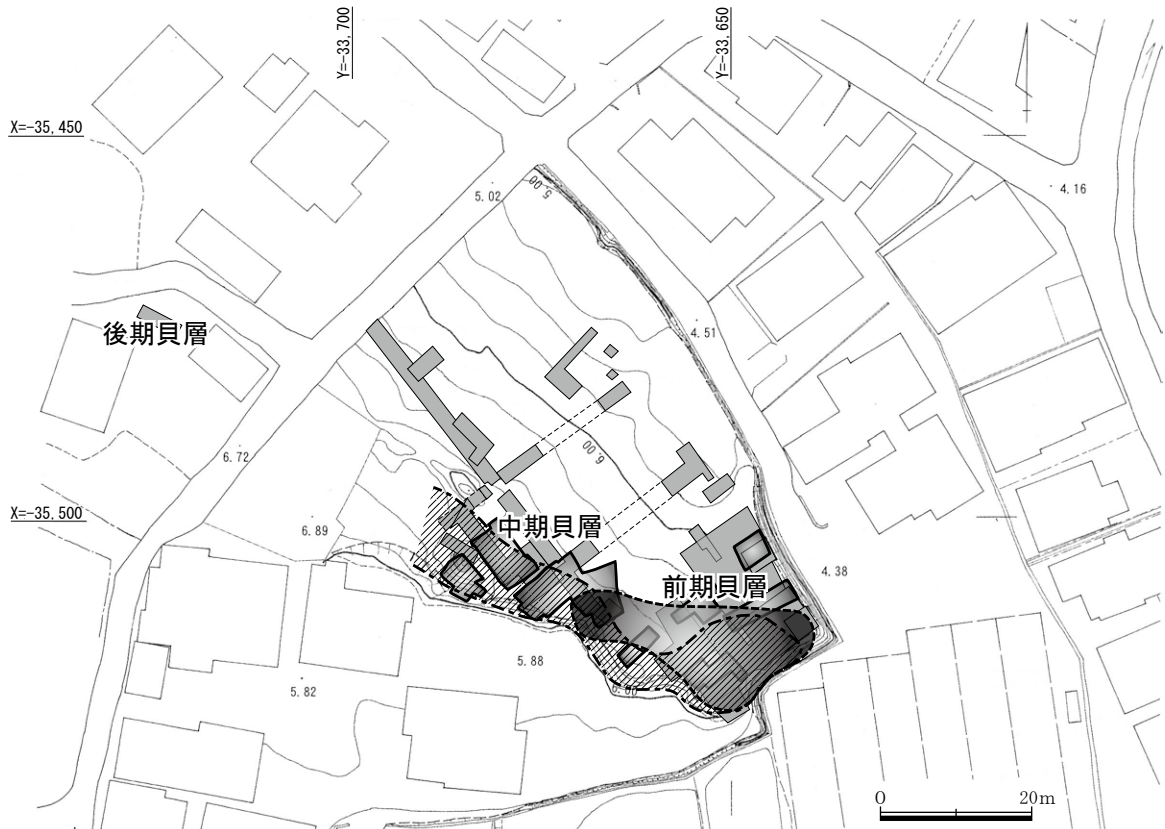
### 第12・13次調査で確認した貝層について

轟式期の貝層の有無の確認、5次調査・6次調査で記録された層序の対応関係の把握、ひいては貝塚中心部の堆積状況の把握を主目的に実施した第12・13次調査の結果、貝層についてはⅢc・Ⅲd類（轟C・D式）土器を含みハイガイ・ハマグリが目立つ前期後葉の貝層と、Ⅳ類（並木式・阿高式ほか）土器を含みカキを主体とする中期後葉の貝層を確認した。また、貝層下の褐色土層にも貝殻や獣骨・魚骨・炭化物片等多くの有機物が含まれることを確認し、5次調査と6次調査の層序の違いは、前期貝層の有無だけでなく、この褐色土層を（混土）貝層とするか土層とするかで表記が分かれたものと推定した。

各調査区で断片的に確認した貝層をつなぎ、堆積範囲を推定したのが第157図である。

前期の貝層と捉えた基本層序Ⅲb層は、2T・3T・4T・5T・8Tの一部で検出し、台地の先端部に広く分布するものと推定した。その範囲は東西約30m、南北約15mを測るが、5次調査Iトレンチ等、やや離れた地点でもおそらく同時期の貝層が報告されており、推定範囲の外側にも飛び地状に存在する可能性がある。また、前述のとおり2次調査報告では「貝塚 SHELL-MOUND」と記して囲んだ範囲が図示されているが、ある程度これと一致する点が興味深い。貝層に含まれる貝はハイガイ・マガキ・ハマグリが優占し、その他スガイ等もみられる。脊椎動物遺体（獣骨・魚骨）も多く含まれ、獣骨ではイノシシ・シカが優占し、魚骨ではエイ・サメ・クロダイ属等が多く確認された。堆積する貝の量は違っても、貝類の組成は下部のⅣa層（褐色土層、前期前葉の轟B式期が中心か）と大差なく、獣骨・魚骨についても目立った変化は無い。出土する土器型式はⅢb類（轟B式）が多くを占めるが、Ⅲd類（轟D式）も散見されることから、貝層の形成時期は前期後葉と推定した。

中期の貝層とした基本層序Ⅲa層は、1T・2T・3T・4T・7T・8Tの各調査区で検出した。そこから推定される堆積範囲は、台地南側の斜面に沿って、幅10m弱で東西50mあまりである。ただし、推定範囲の西側は未調査のため、実際はまだ西側に続いている可能性がある。貝層の厚さは20～40cm程度である。含まれる貝はマガキが優占するが、場所によってハイガイも多く含む。獣骨はⅢb層と変わらずイノシシ・



※範囲はあくまでも断片的な検出に基づく推定。調査以前に削平された可能性も考慮すれば、当初の堆積範囲はまだ広がった可能性が高い。

5次調査 I t でも前期貝層が確認されていることから、前期貝層は推定範囲の外にも飛び地的に存在する可能性がある。

中期貝層の西端は未調査のため不明。

後期貝層は6次調査Eトレンチの1箇所では確認していないため、範囲の推定は不可

第157図 貝層の推定堆積範囲 (S=1/100)

シカが優占する。魚骨はクロダイ・スズキ属が多くみられ、内湾性種が卓越する。この点、外洋性のマダイ亜科を多く含むIV a層の様相と異なっており、漁場の変化がうかがえる(第6章第3節)。5次・6次調査で阿高式期の貝層とされたものにあたるが、台地先端付近の4 T・8 Tを中心にIV a類(並木式)土器が散見される。同じカキ主体の貝層でも、台地先端付近がやや古い堆積の可能性がある。

後期の貝層は12・13次調査では検出されず、調査対象とした台地先端付近には存在しないとみられる。これまでの調査で後期の貝層を確認したのは6次調査Eトレンチのみで、他に9次調査1トレンチの一部で後期の遺物を伴う貝殻廃棄土坑を検出している。前期・中期の貝層からみて北西側の微高地上に分布の中心があるとみられるが、現状では範囲を推定できる程の根拠は無い。

以上3つの貝層は、それぞれ主体となる貝の種類が異なる。この違いを貝の生息域から海進・海退等周辺環境の変化と結び付け、環境の変化や貝塚の形成時期を推定することについては、古くから優れた研究がある(小林1931)。しかし、第6章第2節で述べたように、轟貝塚におけるハイガイ・ハマグリ→マガキ→マテガイ・アゲマキという変化については、隣接する西岡台貝塚と必ずしも連動しない点に注意される。貝種の変化の背景には、環境変化の他にも人間の選択的な貝の採取が想定されることから、その評価については慎重を期すべきであろう。

## (2) 遺構

大正期から始まる轟貝塚の初期の発掘調査では、人骨(土墳墓)を除いて遺構の明確な記録が無く、轟貝

塚で発見された遺構としては長い間、土墳墓の他は5次調査で発見された小児甕棺と6次調査で発見された住居址の一部、及び配石遺構が知られるのみであった<sup>1)</sup>。ところが、第4章で報告した第12・13次調査の結果、貝層の下で集石遺構や土坑等の遺構が確認され、人の生活の痕跡がより直接的に確認されることとなった。以下に、轟貝塚でこれまでに発見された遺構について、種類ごとにその概要をまとめる。

### 小児甕棺（土器棺墓）

第5次調査V b トレンチで出土。御領式の小児甕棺と報告されているが、土器型式としては天城式に相当する。

### 住居址

6次調査C トレンチ 15 グリッドの攪乱層の下で部分的に検出。方形プランとみられ、床面から御領式土器が出土したことにより後期末に比定される。

### 集石遺構

12次・13次調査2 T・3 T・4 T・5 T・8 Tで検出した。このうち、2 Tのものは縄文時代早期末葉とみられる基本層序IV b 層から、他は全て前期前葉～後葉とみられるIV a 層からの検出である。いずれもトレンチ内の広範囲に礫が散乱した状態で検出され、分布に多少の濃淡はあるものの、どこからどこまでをひとつの「集石」とみるか、単位が不明瞭である。3 T IV a 層で検出された土坑 SK01～03 はこの集石に関連する遺構である可能性があるが、特に土坑内から礫の出土は無く、実態は不明である。石材は全てのトレンチで安山岩が圧倒的に多く、他に頁岩・チャート・凝灰岩・砂岩等が若干含まれる。トレンチにより差があるが、変色や亀裂等、被熱の痕跡が認められる礫が多く、3 Tでは出土した礫の4割あまり、5 T・8 Tにおいては6割あまりに被熱の痕跡が認められた。明瞭な痕跡が確認できないものも含め、実際にはより多くの礫が被熱しているとみられる。IV a 層以下を調査したほぼ全てのトレンチで出土していることから、台地先端部の広い範囲に分布しているとみられる。

この他、6次調査B トレンチ 2 グリッドの褐色土層から検出された「配石遺構」も、時期・性格ともに近いものである可能性がある。石の種類や被熱状況等の詳細は不明だが、南北約 1.3 m、東西約 1.1 m の範囲から、拳大～直径 30 cm 前後までの塊石が 20 点出土したとされる。

九州の集石遺構の集成と分類を行った徳永貞紹は、そのあり方からA類：土坑を持つもの、B類：土坑を持たないものの2つに大別し、A類をさらに配石を持つA I 類と配石を持たないA II 類に分類した（徳永 1990）。その上で、縄文時代早期から前期にかけてA類→B類の変遷が想定されるとし、中部九州についてはA II 類・B類と少数のA I 類が存在する早期前半（押型文土器ほか）の状況に対し、早期後半（平底押型文～塞ノ神式）にはB類が主体となるとした。これに則れば、轟貝塚におけるあり方はほとんどがB類で、12次調査3 Tで検出したSK01～03を集石に伴う土坑とみなせばA II 類を一部含むことになる。これらを塞ノ神式・轟A式～轟B式期に位置付けていることを考えれば、徳永の指摘した傾向にほぼ沿ったあり方といえる。

なお、「集石遺構」の定義とは本来、1～3 m 程度の円状に多数の礫を集めたものを差し（斎藤 2004 ほか）、その中でも特に被熱した礫を多く含むものは「焼礫集積遺構」とすべきとの意見もある（上田 1983・谷口 1986）。その意味で、轟貝塚で検出した広範囲に多数の礫が散在する状況は、集石遺構と呼ぶにふさわしくないとの見方もあろう。しかし、平成 15（2003）年に行われた第 13 回九州縄文研究会宮崎大会において、集石遺構を「人為的な加熱による破碎・赤化礫が集積した遺構」という共通認識の下に集成している点等も踏まえ（九州縄文研究会編 2003）、広義には集石遺構と呼び得るものと捉えて、本書では集石遺構の名称を使用している。

現状、遺構の性格については明らかにし難いが、一般に想定される集石炉やストーン・ボイリング等、火を伴う加熱・調理等に関わる遺構である可能性は高いとみられる。

## 土 坑

12次調査4Tの南東端部で、貝層下の褐色土層であるIV a層中からその下のIV b層に掘り込まれた4T SK01は、焼土を覆土とする焼土坑である。覆土中から炭化した貝殻や獣骨、ブナ科の堅果類子葉とみられる炭化種子等が出土したことから炉跡と考えられる。検出層位から、遺構の時期は縄文時代前期前葉と考えられ、出土した炭化獣骨の年代測定の結果、4804-4692・4827-4815 cal BC（およそ6800年前）の値が得られている。

焼土坑の他、多量の貝殻を廃棄した廃棄土坑が3基発見されている（9次1T SK01・13次8T SK02・03）。9次1T SK01は、砕けた貝殻や獣骨と共に磨消縄文を持つVI類土器を出土したことから、後期中葉に位置づけられる。13次8T SK02・03は前期後葉に形成されたとみられる貝層（III b層）の下部から褐色土層のIV a層に掘り込まれており、時期はおよそ前期中葉～後葉と考えられる。広く貝層が形成されるようになる前段階の、点的な廃棄の様子を示す遺構として貴重である。

## 土墳墓（人骨）

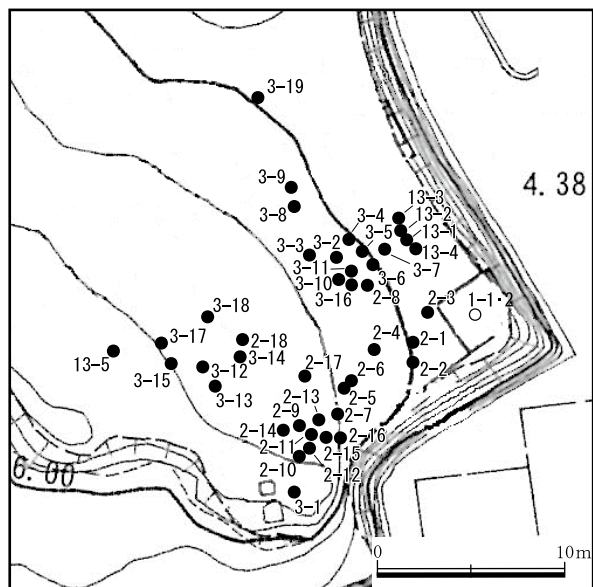
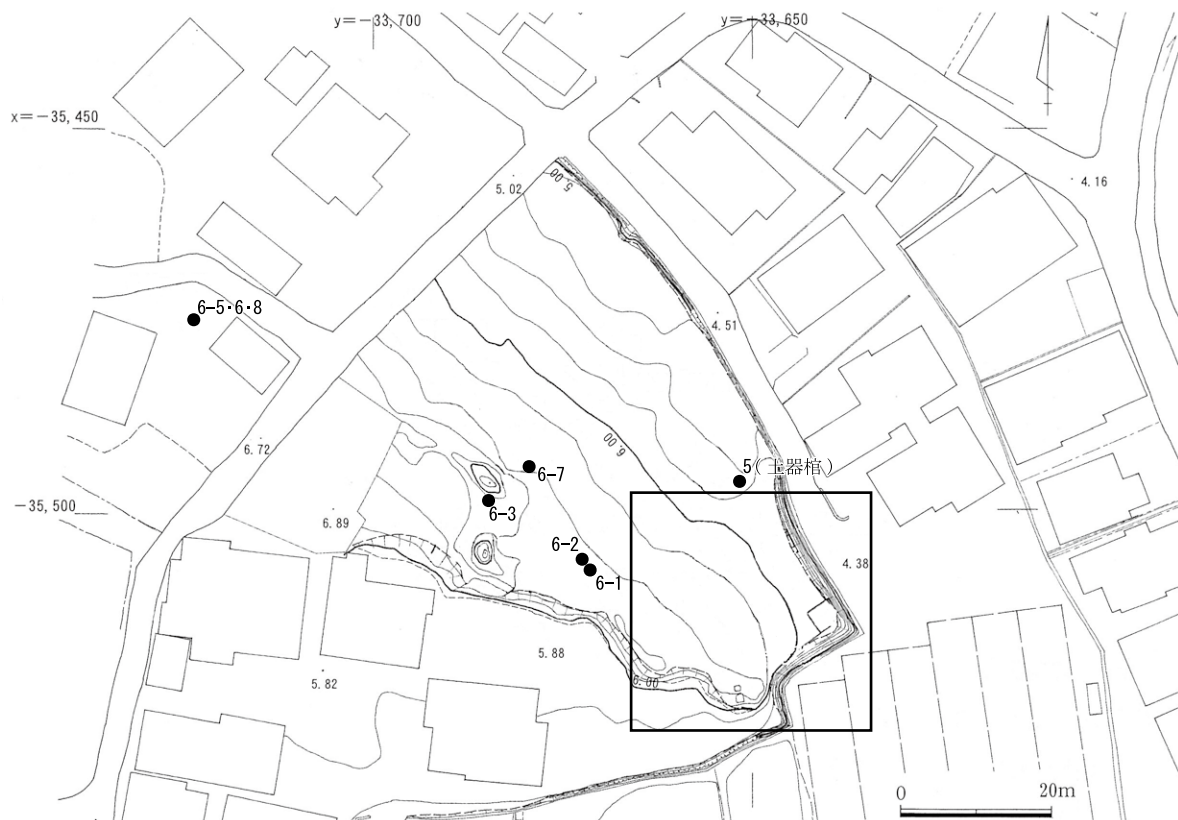
轟貝塚では、1次調査2体、2次調査18体、3次調査34体、5次調査1体、6次調査7体、13次調査5体、その他2体の計69体の人骨が出土・採集されている<sup>2)</sup>（第158図、第44表）。遺存状態が良い人骨のほとんどが仰臥屈葬等の姿勢をとる埋葬人骨とみられるが、例えば京都帝大が実施した第2次調査では、墓壇の検出層位でなく、あくまでも人骨そのものの出土位置で示されているため、帰属する時期を層位学的に特定することは困難である<sup>3)</sup>。土墳墓の検出層位から層位学的に時期を特定できるのは、13次調査で出土した5体（1号～5号）のみで、早期末が1体、前期初頭が3体、前期後葉が1体である<sup>4)</sup>。それ以外で出土遺物や調査時の日誌の記録でおおまかな時期が特定できるものは、轟式土器を単純に含む褐色土層出土の6次調査1号人骨や、土墳墓埋土出土土器から縄文時代後期と推定される同8号人骨等がある。

近年、2次調査出土人骨の一部に対しては放射性炭素年代測定が行われており、その結果によれば早期末から後期初頭まで幅広い時期の人骨が含まれるとされる（山田・日下・米田2019）。特に早期末から前期前葉に関しては複数の人骨が該当し、付近に一定の墓域を形成していたことが推察される。本書で報告した13次調査2～5号人骨に対し行った年代測定結果もこれを裏付けており、2号人骨は5210-4988 cal BC（およそ7100年前）、3号人骨は5061-4899 cal BC（およそ7000年前）、4号人骨は5563-5478 cal BC（およそ7500年前）、5号人骨は4046-3814 cal BC（およそ6000年前）の値が得られている（第45表、第4章付論1参照）。また、重複関係から4号人骨→1号人骨→2号人骨の順であることから、1号人骨は5563-5478 cal BC（およそ7500年前）から5210-4988 cal BC（およそ7100年前）の間に位置付けられる。

上記の出土人骨の年代分析結果と遺構の重複関係から、早期末（2次1号・18号、13次4号）、前期初頭から前葉（2次6号・17号、13次1～3号）、前期後葉（2次3号・5号、13次5号）、後期初頭（2次4号）の4つの時期に区分でき、後期初頭の2次4号人骨を除けば、台地先端で多量に出土した早期末から前期後葉にかけての土器群と対応関係にあることが明らかとなった<sup>5)</sup>。このことから、第1～3次調査で出土した台地先端部に集中する人骨の年代は、その多くが早期末から前期後葉に位置付けられる可能性が高い。

その他、6次調査1号人骨は両腕に貝輪を装着した状態で発見され、腹部には多量の魚骨を含む食物残渣（糞石）が確認される等、縄文時代当時の風俗・食生活を知る上で貴重な資料である。

第1節 甕貝塚を構成する要素



第158図 甕貝塚発掘調査出土人骨地点  
(S=1/100, S=1/40)

※中世除く。数字は「調査回数」-「人骨番号」を示す。  
第1次調査人骨出土地点は、特定できないため○  
で表示

第44表 轟貝塚出土人骨一覧<sup>1)</sup>

No.	調査 次数	出土 地点	出土層位	人骨 番号	性別	年齢	埋葬 姿勢	炭素年代 (cal BC)	遺存状況等	文献
1	1	-	不明		男性		仰臥屈葬		頭蓋を除けば、ほぼ全身骨	1・2
2	1	-	不明		女性		仰臥屈葬		頭蓋の一部、その他は破片が多く、わずかに四肢骨の一部が残存	1・2
3	2	I区	貝層最下部～ 有機土層	1号			不明	5350 - 5090	散乱不完全人骨	3・4
4	2	I区	貝層最下部～ 有機土層	2号			不明		散乱不完全人骨	3・4
5	2	III区	貝層最下部～ 有機土層	3号	女性	大人	仰臥屈葬	3650 - 3370	頭部無し右上半身、右大腿部のみ残存	3・4
6	2	IV区	貝層中	4号	女性	熟年期	仰臥屈葬	2580 - 2340	ほぼ全身骨	3・4
7	2	IV区	貝層中	5号	女性	壮年期	座位屈葬	3650 - 3380	ほぼ全身骨	3・4
8	2	IV区	貝層下有機土 層	6号	女性	壮年期	仰臥屈葬	4850 - 4590	ほぼ全身骨	3・4
9	2	IV区	貝層下有機土 層	7号	男性?	大人	仰臥		頭蓋・肩甲骨・上肢等のみ	3・4
10	2	V区	貝層最下部～ 有機土層	8号		乳児?	仰臥屈葬		散乱不完全人骨	3・4
11	2	VI区	貝層下有機土 層	9号	男性	大人	仰臥		頭部及び脊椎のみ	3・4
12	2	VI区	貝層最下部～ 有機土層	10号	男性	大人	仰臥屈葬		ほぼ全身骨?	3・4
13	2	VI区	貝層最下部～ 有機土層	11号	男性	大人	仰臥屈葬		11・12号は両側近接。合葬?	3・4
14	2	VI区	貝層最下部～ 有機土層	12号	女性	大人	仰臥屈葬		11・12号は両側近接。合葬?	3・4
15	2	VI区	貝層最下部～ 有機土層	13号	男性	大人	仰臥屈葬		ほぼ全身骨?	3・4
16	2	VI区	貝層最下部～ 有機土層	14号		子供	仰臥		一部のみ残存	3・4
17	2	VI区	貝層最下部～ 有機土層	15号	女性	大人	仰臥屈葬		ほぼ全身骨?	3・4
18	2	VI区	貝層下有機土 層	16号	女性	熟年期	仰臥屈葬		ほぼ全身骨?	3・4
19	2	VIII区	貝層下有機土 層	17号	男性	熟年期	右下側臥屈 葬	4850 - 4610	ほぼ全身骨	3・4
20	2	IX区	貝層中	18号	女性	青年期	左下側臥屈 葬	5340 - 5060	ほぼ全身骨	3・4
21	3	不明	不明	1号	女性	成年	不明		四肢骨。左上腕部骨混入	5
22	3	不明	不明	2号	女性	成年	不明		四肢骨。轟1, 2, 3号のどれとも判断できない頭骨片あり	5
23	3	不明	不明	3号	男性	壮年	不明		壮年男性の2個体分の体幹体肢骨片。この他、女性と思われる右尺骨と大腿骨の破片混入	5
24	3	不明	不明	4号	女性	熟年	不明		断片的全身骨格	5
25	3	不明	不明	5号	男性	成年	不明		体幹体肢骨。幼児骨を含む混入骨あり	5
26	3	不明	不明	6号	女性	壮年	不明		断片的全身骨格	5
27	3	不明	不明	6'号	女性		不明		全身の破片を含むが複数個体あると思われる。頭骨片は女性	5
28	3	不明	不明	7号	男性	成年	不明		部分的全身骨格。女性の右大腿骨混入	5
29	3	不明	不明	8号		少年	不明		体幹体肢骨	5
30	3	不明	不明	9号	女性	熟年	不明		全身骨格。保存良好	5
31	3	不明	不明	10号	女性	成年	不明		断片的全身骨格。長谷部(1923)は熟年男性としている	5
32	3	不明	不明	11号			不明		大腿骨、脛骨の断片	5
33	3	不明	不明	12号	女性	青年	不明		断片的全身骨格	5
34	3	不明	不明	13号	男性	若年	不明		体幹体肢骨	5

第1節 甕貝塚を構成する要素

No.	調査 次数	出土 地点	出土層位	人骨 番号	性別	年齢	埋葬 姿勢	炭素年代 (cal BC)	遺存状況等	文献
35	3	不明	不明	14号	男性	熟年	不明		体幹体肢骨。保存良好。尺骨と脛骨の破片が混入。右橈骨に骨折の跡	5
36	3	不明	不明	14'号			不明		幼児の四肢骨片	5
37	3	不明	不明	15号	男性?	壮年	不明		部分的全身骨格	5
38	3	不明	不明	15'号			不明		乳児(3ヵ月)の頭骨と、幼児(3~4歳)の体幹体肢骨片。成人と思われる頭骨片混入	5
39	3	不明	不明	16号		若年	不明		下肢骨片。成人の下肢骨片混入	5
40	3	不明	不明	17号	男性	熟年	不明		全身骨格。保存良好	5
41	3	不明	不明	19号	男性	壮年	不明		全身骨格。比較的保存良好	5
42	3	不明	不明	20号	男性	成年	不明		部分的全身骨格	5
43	3	不明	不明	21号	女性	壮年	不明		全身骨格。比較的保存良好。橈骨と尺骨は別個体の男性と思われる	5
44	3	不明	不明	22号	男性	熟年	不明		断片の全身骨格	5
45	3	不明	不明	23号			不明		体幹体肢骨片	5
46	3	不明	不明	24号			不明		小児の頭骨と幼児の体幹体肢骨	5
47	3	不明	不明	25号	女性	壮年	不明		断片の全身骨格。若年個体の鎖骨片混入	5
48	3	不明	不明	26号	男性?	熟年	不明		頭骨	5
49	3	不明	不明	01号		成年	不明		橈骨と腓骨の破片	5
50	3	不明	不明	02号	男性	壮年	不明		断片の全身骨格。大腿骨は別個体の可能性あり	5
51	3	不明	不明	03号	男性?	成年	不明		断片の全身骨格。幼児骨混入	5
52	3	不明	不明	04号	女性	成年	不明		断片の全身骨格	5
53	3	不明	不明	05号			不明		成年女性の寛骨片、男性と思われる脛骨片、幼児の右上腕骨等が混ざっている	5
54	3	不明	不明	06号			不明		体幹体肢骨片	5
55	5	Vbt	混土具層			幼児	不明		土器棺墓(天城式期)	6
56	6	A21 A22	褐色土層	1号	女性	熟年	仰臥屈葬		両手の手根骨から指骨の一部、両足の中足骨から指骨の一部、肩甲骨や骨盤の一部を欠損。それ以外の骨はおおむね残存。腹腔に食物残滓	7・8
57	6	A21	混貝土層-褐色土層間	2号	女性	熟年	仰臥屈葬		左肩甲骨や骨盤の一部等を欠損。その他の骨はおおむね残存	8
58	6	B3	褐色土層	3号	不明	老年	仰臥屈葬?		残存状態不良。頭骨の上顎骨や下顎骨、頬骨等を欠く	8
59	6	E3	黒褐色混土具層	4号	女性	熟年	伏臥屈葬		中世人骨。尾骨や肩甲骨の一部を欠くが、両手足の指骨も多数残る等、その他の骨はおおむね残存	8
60	6	E3	黒褐色混土具層	5号	不明	若年	仰臥屈葬		頭骨は比較的良好に遺存しているが、全体的に各部位の一部もしくは全部を欠く	8
61	6	E3	黒褐色混土具層	6号	女性	老年	不明		頭骨は比較的良好に遺存。肋骨や椎骨も比較的多く残るが、上腕骨や尺骨、橈骨、骨盤の大半を欠く	8
62	6	B7	黒褐色土層	7号	不明	熟年~老年	横臥屈葬		頭骨が下顎骨や側頭骨の一部のみで大半を欠損。全体的に遺存状態は不良	8
63	6	E3	黒褐色混土具層	8号	女性	老年	横臥屈葬		上顎骨を欠くが、頭骨が比較的良好に残存。四肢骨の多くが残る。腰椎に変形性脊椎痕あり	8
64	13	3T	IVb層	1号	女性	熟年	仰臥屈葬		頭蓋、四肢骨の一部残存。頭蓋は前頭骨左側と左側頭頂骨の一部欠損。四肢骨は肩甲骨(左)、鎖骨(左)、上腕骨、橈骨、尺骨が残存。	9
65	13	3T	IVb層	2号	女性	壮年	仰臥屈葬	5210-4988	頭蓋は脳頭蓋のみ残存。四肢骨は肩甲骨(左)、鎖骨(両側)、上腕骨、橈骨、尺骨が残存	9
66	13	3T	IVb層	3号	女性	壮年	仰臥屈葬	5061-4899	頭蓋のうち、脳頭蓋は前頭骨と左側頭頂骨から後頭骨にかけて、顔面頭蓋は左側頬骨と上脛骨が残存。四肢骨は肩甲骨(両側)、上腕骨、橈骨、尺骨が残存	9
67	13	3T	IVb層	4号	男性	壮年	仰臥屈葬	5563-5478	頭蓋のうち、脳頭蓋は左側頭頂骨と左側側頭骨の一部、顔面頭蓋は右側頬骨の一部と上顎骨が残存。四肢骨は、肩甲骨(右)、鎖骨(右)、上腕骨、橈骨、尺骨が残存	9
68	13	8T	IVa-1層	5号	女性	熟年	仰臥屈葬	4046-3814	頭蓋の保存状態は良好で、ほぼ完全な状態。外耳道骨腫あり。四肢骨は、肩甲骨(両側)、鎖骨(両側)、上腕骨、橈骨、尺骨が残存。ミトコンドリアDNA分析結果は、ハプログループ「M7a1a」	9



No.	調査 次数	出土 地点	出土層位	人骨 番号	性別	年齢	埋葬 姿勢	炭素年代 (cal BC)	遺存状況等	文献
69	—	—	—						第1次調査以前に熊本医学専門学校の川上漸・山崎春雄が轟貝塚で採集し、京都帝大の鈴木文太郎が譲り受けた人骨(頭骨片, 四肢骨片)	1・2
70	—	—	—						鈴木文太郎が、付近の小学校(旧轟小学校か)から譲り受けたとされる人骨	1・2

## 註

- 1) 轟貝塚第2次調査出土人骨の性別・年齢等は、山田康弘 2002『人骨出土例の検討による縄文時代墓制の基礎的研究』平成12・13年度科学研究費補助金〔奨励研究(A)〕成果研究報告書による。第2次調査出土人骨の炭素年代(山田・日下・米田2019)の較正年代については、「cal BP」表記から「cal BC」表記へ変更した。また、第3次調査出土人骨の人骨番号・性別・年齢・遺存状況等は、海部・中橋・橋本1998による(付編1-3参照)。なお、表中の第3次調査人骨番号と京都大学文学部考古学研究室所蔵の人骨出土地点が表示された調査区配置図との対応関係は不明。

## 文献

- 鈴木文太郎 1918a「肥後轟貝塚河内導明寺等にて発掘せる人骨に就て」『人類学雑誌』第33巻第3号 人類学研究会
- 鈴木文太郎 1918b「河内国府肥後轟貝塚等にて発掘せる人骨に就て報じ併せて石器時代の住民に及ぶ」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第2冊
- 濱田耕作・榊原政職・清野謙次 1920「肥後轟貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第5冊
- 山田康弘・日下宗一郎・米田稔 2019「熊本県轟貝塚出土人骨の年代」『先史学・考古学論究』VII 龍田考古会
- 海部陽介・中橋孝博・橋本裕子 1998「九州地方出土縄文時代人骨の形態学的特徴：東京大学総合研究博物館所蔵標本資料について」『国立科博専報』第30巻 国立科学博物館
- 松本雅明・富樫卯三郎 1961「轟式土器の編年—熊本県宇土市轟貝塚調査報告—」『考古学雑誌』第47巻第3号 日本考古学会
- 小片丘彦 1972「古病理学的にみた日本古人骨の研究」『新潟医学雑誌』第86巻第11号 新潟医学会
- 宇土市教育委員会 2008『轟貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第30集
- 宇土市教育委員会 2017『轟貝塚』II 宇土市埋蔵文化財調査報告書第36集

第45表 轟貝塚出土人骨炭素年代測定データ(年代順)

No.	調査 次数	出土 地点	出土層位	人骨 番号	性別	年齢	埋葬 姿勢	測定ID	炭素年代 (cal BC)	遺存状況等
67	13	3T	IVb層	4号	男性	壮年	仰臥屈葬	Beta-580531	5563-5478	頭蓋のうち、脳頭蓋は左側頭頂骨と左側側頭骨の一部、顔面頭蓋は右側頬骨の一部と上顎骨が残存。四肢骨は、肩甲骨(右)、鎖骨(右)、上腕骨、橈骨、尺骨が残存
3	2	I区	貝層最下部～有機土層	1号			不明	TKA-17926	5350 - 5090	散乱不完全人骨
20	2	IX区	貝層中	18号	女性	青年期	左下側臥屈葬	TKA-17932	5340 - 5060	ほぼ全身骨
65	13	3T	IVb層	2号	女性	壮年	仰臥屈葬	Beta-580529	5210-4988	頭蓋は脳頭蓋のみ残存。四肢骨は肩甲骨(左)、鎖骨(両側)、上腕骨、橈骨、尺骨が残存
66	13	3T	IVb層	3号	女性	壮年	仰臥屈葬	Beta-580530	5061-4899	頭蓋のうち、脳頭蓋は前頭骨と左側頭頂骨から後頭骨にかけて、顔面頭蓋は左側頬骨と上顎骨が残存。四肢骨は肩甲骨(両側)、上腕骨、橈骨、尺骨が残存
8	2	IV区	貝層下有機土層	6号	女性	壮年期	仰臥屈葬	TKA-17930	4850 - 4590	ほぼ全身骨
19	2	VIII区	貝層下有機土層	17号	男性	熟年期	右下側臥屈葬	TKA-17931	4850 - 4610	ほぼ全身骨
68	13	8T	IVa-1層	5号	女性	熟年	仰臥屈葬	PLD-37569	4046-3814	頭蓋の保存状態は良好で、ほぼ完全な状態。外耳道骨腫あり。四肢骨は、肩甲骨(両側)、鎖骨(両側)、上腕骨、橈骨、尺骨が残存。ミトコンドリアDNA分析結果は、ハプログループ「M7a1a」
5	2	III区	貝層最下部～有機土層	3号	女性	大人	仰臥屈葬	TKA-17927	3650 - 3370	頭部無し右上半身、右大腿部のみ残存
7	2	IV区	貝層中	5号	女性	壮年期	座位屈葬	TKA-17929	3650 - 3380	ほぼ全身骨
6	2	IV区	貝層中	4号	女性	熟年期	仰臥屈葬	TKA-17928	2580 - 2340	ほぼ全身骨

## 第2節 遺跡の範囲

### (1) 周辺調査の結果

大正期から昭和期に、計6次にわたって発掘調査が行われた轟貝塚だが、これらの調査は全て貝塚の中心部である台地上先端付近を対象としたものである。これに対し、宇土市教育委員会では遺跡の範囲確認や貝塚に伴う居住域の把握を目的に、第7～11次調査を実施した。

第7・8次調査では、貝層の堆積範囲を西側から東側に向かって舌状に派生した台地の先端部、南北約80～100 m、東西約70～80 mの範囲内に限定される可能性が高いことを示し、その外側には攪乱、流れ込みによる二次堆積が広がるとした（宇土市教育委員会2006）。また、貝塚が所在する台地の北側・東側の低地で、現地表から2 m以上も下がる標高2 m付近で、縄文時代後期の土器等を少量含む混貝土層（混土貝層）を検出した。

貝塚北西側の微高地上を中心に、貝塚に伴う居住域の把握を主目的に実施した第9～11次調査では、比較的貝塚中心部に近い第1・第3トレンチを除き、縄文時代の遺構・遺物はほぼ検出されなかった。中には弥生時代・中世の遺物が多数出土する地点もあり、これらの時代に縄文時代の遺物包含層が削平された可能性も考えられるが、そうであれば、攪乱層から少なからず縄文時代の遺物が出土するのが自然である。しかし、第3章で示すとおり、それもほとんど無いことから、貝塚北西側の微高地上に縄文時代の遺跡が広く展開していた事実は無いと判断される。

以上により、轟貝塚における遺構・遺物の分布範囲は、台地先端部を中心とした東西約110 m、南北約90 mの範囲に集約されるといえる。これは先に示した貝層の堆積範囲とほとんど変わらず、貝層堆積範囲の外側に居住域が存在するとした当初の想定とは半ば外れた結果である。台地先端部では縄文時代早期末～前期前葉の遺構を前期後葉の貝層の下から検出しており、他にも多くの遺構がより新しい時期に形成された貝層の下等に埋没して存在する可能性が高いと言える。

なお、台地周辺の低地で縄文時代後期の土器片等を少量伴って検出された混貝土層は、細かく破碎されている貝が主体であり、台地上からの流れ込みである二次的な堆積である可能性が高い。ただし、貝層の検出は標高2 m前後に集中しており、出土した土器片にⅥ類（磨消縄文系土器群）・Ⅶ類（黒色磨研土器群）が多い点を踏まえれば、海進のピークに対し少し引いた海岸線に形成された後期の貝層が付近に存在する可能性も否定できない。

### (2) 周辺の同時代遺跡

轟貝塚における遺跡の広がりや変遷等を考える上で、直線距離で100 mにも満たない至近距離に存在する西岡台貝塚の存在は重要である。

西岡台貝塚は、轟貝塚が立地する台地の東側で幅50 mあまりの低地部（谷）を挟んで向かい合う、西岡台丘陵の西麓に位置する貝塚である。過去の調査により、貝層は前期～中期の遺物を含む下層と、後期前半の遺物を含む上層の2種類が確認されている（宇土市教育委員会1985・古森2002）。また貝層の他に、標高約2.5 mを検出面とする貯蔵穴が5基検出されている。湧水層に掘り込んでイチイガシ等の堅果類を水漬け保存したとみられるこれらの遺構は、轟B式土器が出土したものと轟C式・船元式土器が出土したものが報告されている。これにより遺構の時期は縄文時代前期前葉～中期前半頃のいずれかと推定されるが、それぞれの出土数のごく少数のため、これによって直ちに遺構の時期を決定するのは難しい。

報告された調査成果による限り、出土土器で最も古いのは轟B式で、早期末に遡る塞ノ神式や轟A式土器はみられない。これにより、遺跡のはじまりは轟貝塚よりやや遅れる縄文時代前期前葉が想定される。また、

続く曾畑式土器や中期の船元式土器が一定数報告されている点は、これらが明らかに少ない轟貝塚でのあり方と異なる要素と言え、轟貝塚における空白期を補うようでもある。両貝塚とも前期～後期の遺物を包含し、同時期並存の印象を受けるが、厳密には土地利用のピークに若干の時期差がある、相互補完的なあり方をしている可能性がある。

その他、轟貝塚で出土数の少ない曾畑式土器が出土した遺跡として、馬場遺跡や、距離は離れるが曾畑貝塚等が知られる。轟貝塚で遺物の出土が低調な曾畑式期における周辺の状況を考える参考としてここに紹介する。

馬場遺跡は、西岡台貝塚が立地する独立丘陵の南麓に所在する（第1章第2図）。過去に須恵器等と共に曾畑式土器を含む縄文土器が発見されており、一帯に縄文時代を含む複合遺跡の存在が推定される（熊本県教育委員会 1994）。また、平成25年度に宇土市が実施した遺跡詳細分布調査では、付近で黒曜石の剥片を採集した他、遺跡の東側で貝殻の散布を確認した。轟貝塚とは直線距離で約700mの距離であり、ここに曾畑式期の縄文時代遺跡が存在するとすれば、両者の関係が注目される。今後の調査に期待したい。

曾畑貝塚は、轟貝塚から直線距離で約4km離れる宇土市岩古曾町に所在する。轟貝塚と同じく、縄文海進期に現在の熊本平野に深く入り込んだとみられる古有明海沿岸<sup>6)</sup>に位置するとみられる貝塚で、曾畑式土器の標式遺跡として知られる。過去の調査で東西2地点の貝塚が確認され、特に西貝塚と呼ばれる貝塚では層位的に遺物が把握されている。それによれば、貝層下の土層から押型土器、轟式土器が、下部の貝層（第2貝層）では曾畑式土器が出土し、上部の貝層（第1貝層）からは鐘崎式土器等の磨消縄文系土器群が出土したとされる。貝層がそれぞれ前期・後期に形成されたことがわかる点と、何より九州の縄文土器編年を層位的に裏付けた点で貴重な成果と言える（宇土市教育委員会 2011）。また、貝塚中心部から南西に約100m離れた低地部では、イチイガシ等が残る貯蔵穴が62基検出された（熊本県教育委員会 1988）。集落内における廃棄場所（貝塚）と貯蔵場所の土地利用の区別やその立地の特徴を示す良好な資料といえる<sup>7)</sup>。

### 第3節 遺跡の変遷

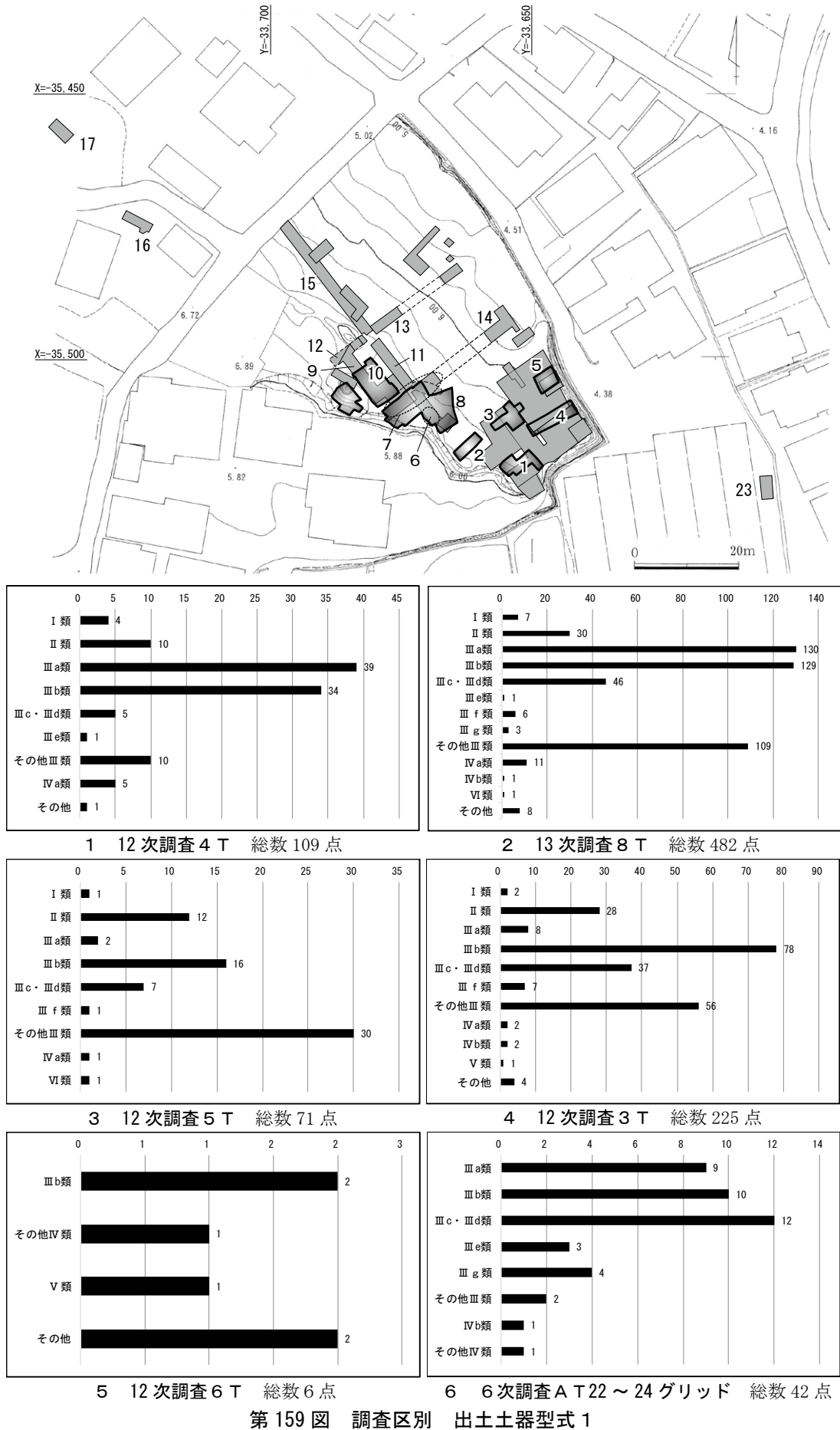
#### 土器の平面分布からみた遺跡の変遷

轟貝塚におけるこれまでの調査で、縄文時代早期から後期まで、幅広い時期の遺物が出土している。これにより、連続的かどうかはともかく、総合的な遺跡の存続時期がかなり長いことがうかがえる。またその中で、第1節で示したように、前期・中期・後期の大きく3時期に分かれる貝層が、少しずつ場所を変えながら形成されたことが判明している。しかし一方で、各貝層の形成に伴う居住域については、部分的に遺構が検出されているのみで、時期ごとの詳しい位置や範囲、その遷り変わりについて明らかではない。

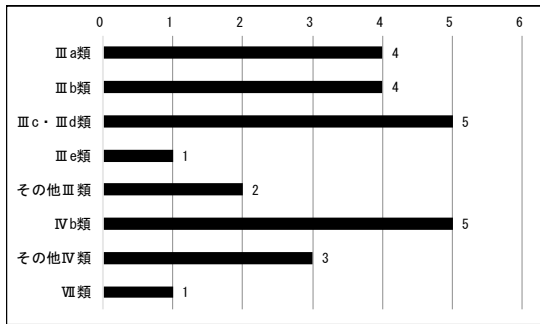
そこで、各時期において遺跡内のどこが土地利用のピークであるのかを知るため、これまでの調査で出土した土器を地点ごと、分類（型式）別に数量を示したのが第159～162図である。検討対象としたのは、本書を含むこれまでの調査報告から一定の分類と出土地点の絞り込みが可能な第6次～13次調査、及び昭和58（1983）年度に調査された西岡台貝塚の調査報告書掲載遺物である（宇土市教育委員会 1985・2006・2008及び本書第3章～4章）。報告書に掲載された縄文土器を調査区ごとに集計し、台地先端部を基準として近い順に番号を付し示した（地点1～25）。最後に示す26は、西岡台貝塚を除く地点1～23全体の数量である。なお、平面上の位置関係で近い地点のものを隣り合って示すため、地点番号は調査回数に関わらない通し番号としている。

もちろん、出土遺物の中には、小片で検討に堪えない等の理由で報告書に掲載されていないものも多数存在する。それが検討に加えられていない点や、計数の仕方が口縁部や底部の数量に基づく推定個体数でなく、

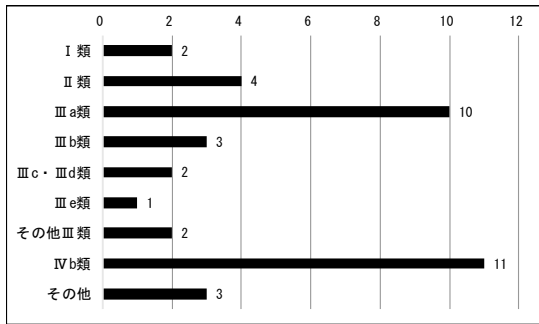
第3節 遺跡の変遷



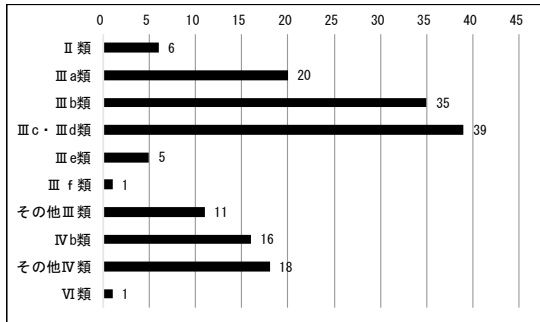
第159図 調査区別 出土土器型式1



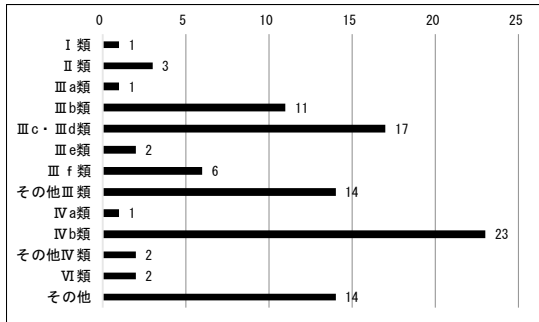
7 6次調査 CT 1~6グリッド 総数 25 点



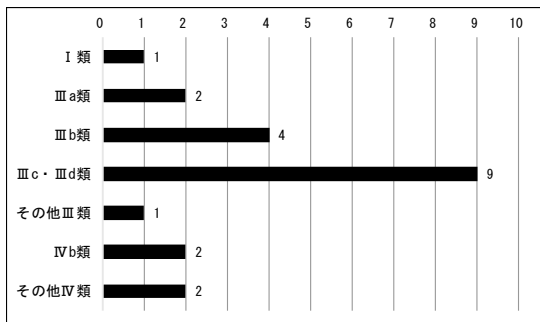
8 12次調査 2 T 総数 38 点



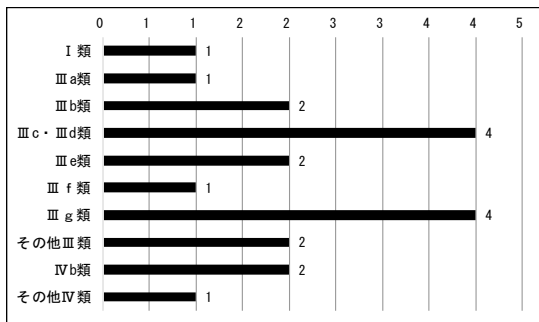
9 6次調査 D T 総数 152 点



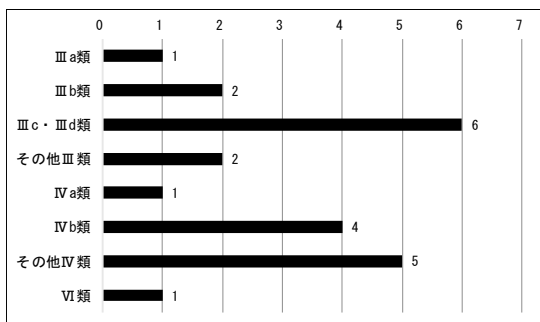
10 12次調査 1 T 総数 97 点



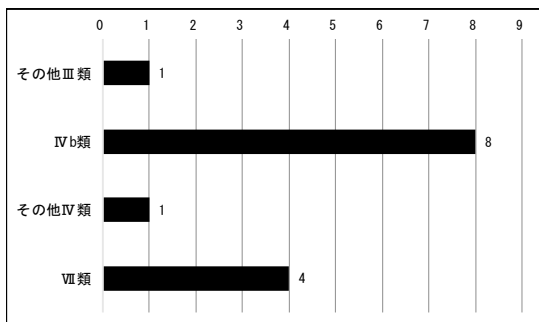
11 6次調査 A T 15~20グリッド 総数 21 点



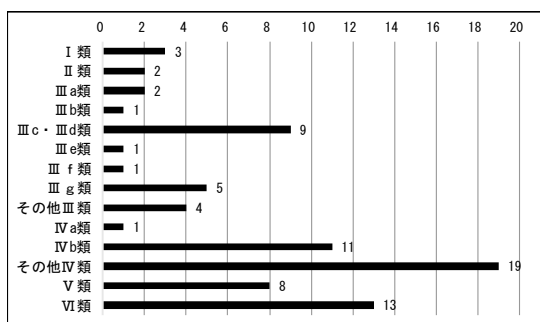
12 6次調査 B T 1~3グリッド 総数 20 点



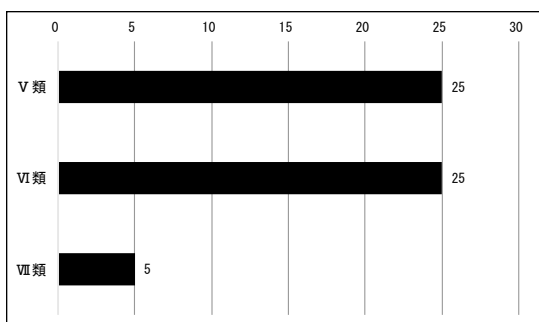
13 6次調査 B T 5~9グリッド 総数 22 点



14 6次調査 C T 13~15グリッド 総数 14 点

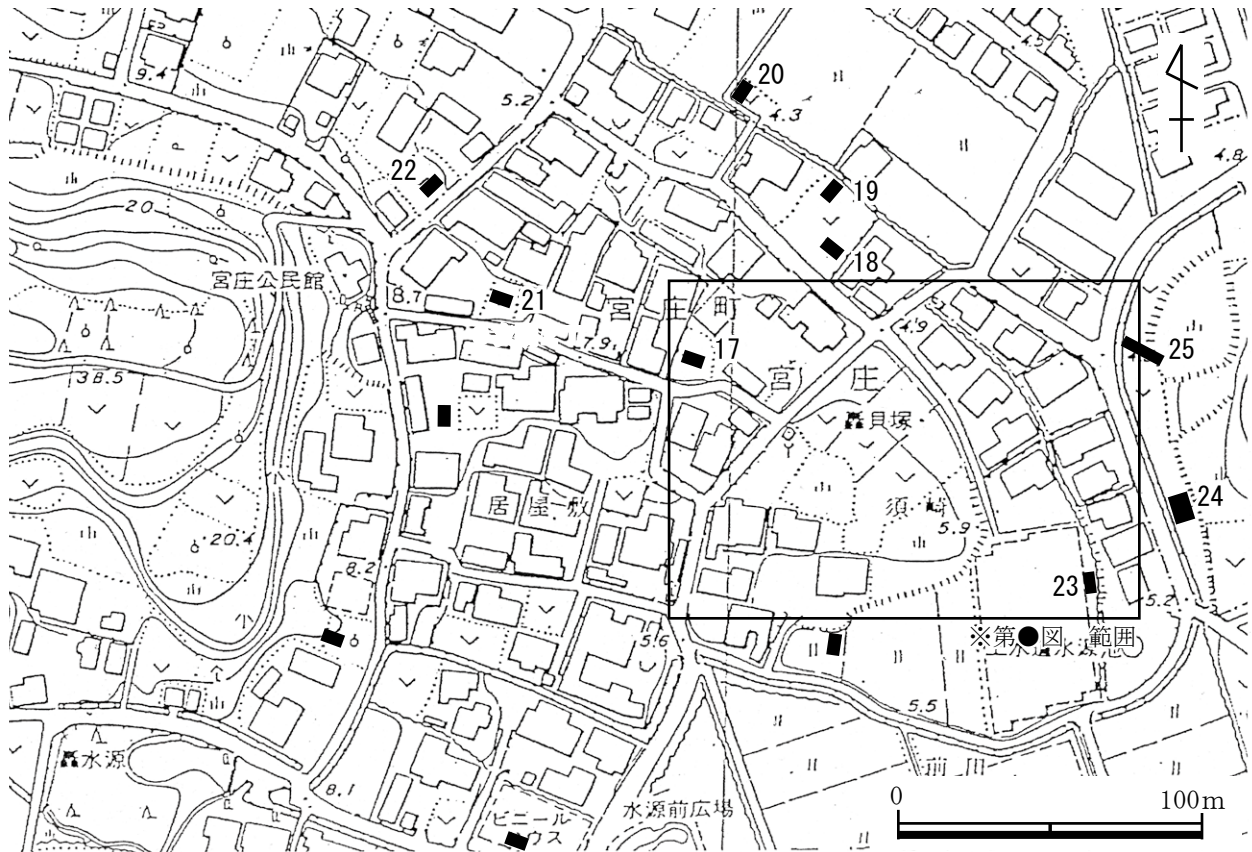


15 6次調査 A T 1~13グリッド 総数 80 点

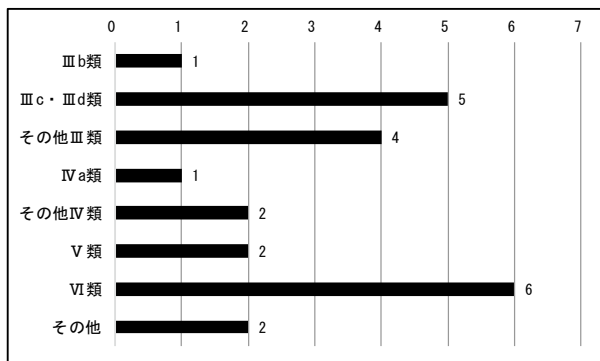


16 6次調査 E T 総数 55 点

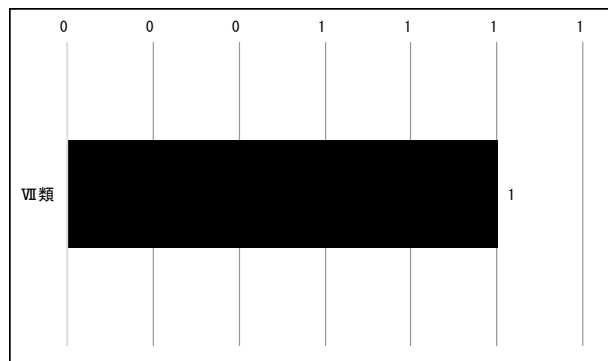
第160図 調査区別 出土土器型式2



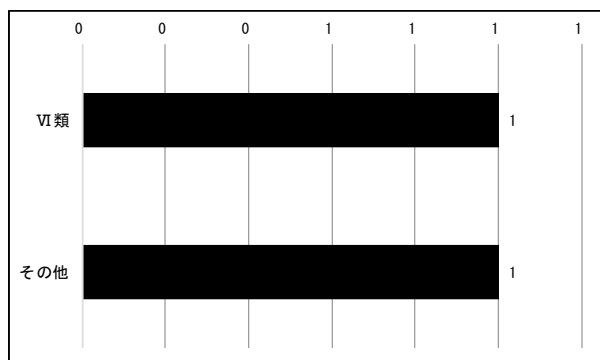
※■で示した調査地点のうち、番号の無いものは縄文土器の出土0点



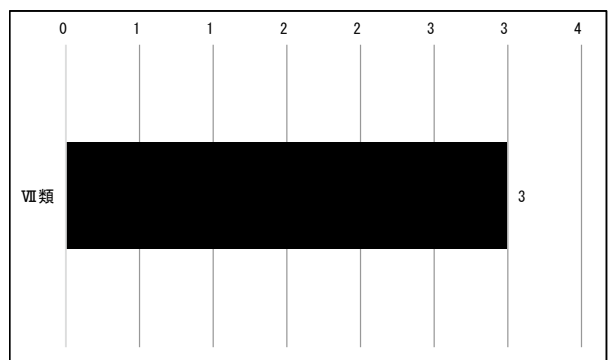
17 9次調査1T 総数23点



18 10次調査3T 総数1点

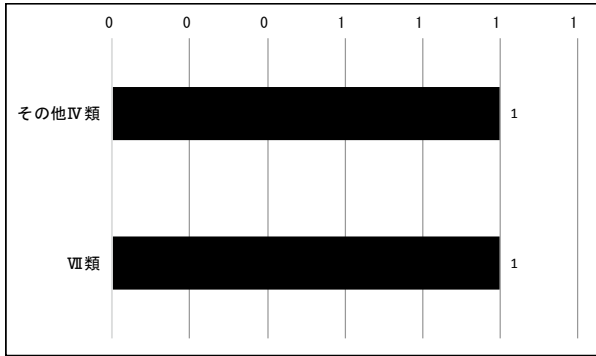


19 7次調査1T 総数2点

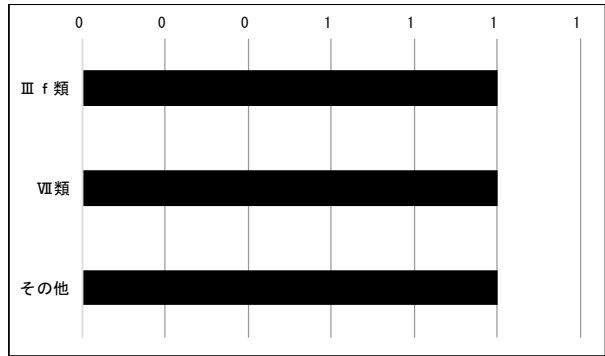


20 8次調査4T 総数3点

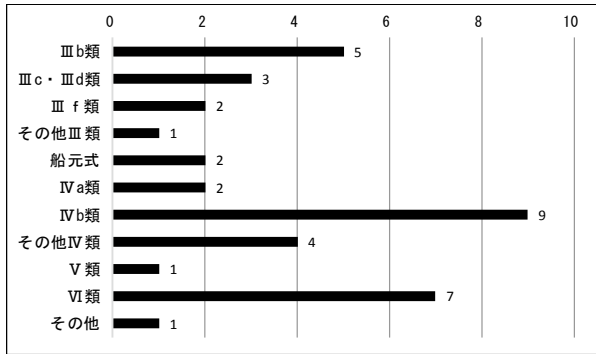
第161図 調査区別 出土土器型式3



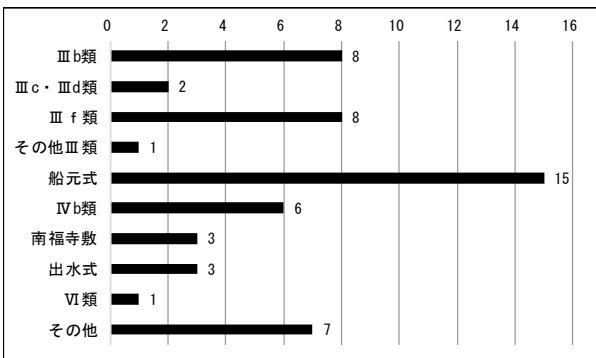
21 9次調査2T 総数2点



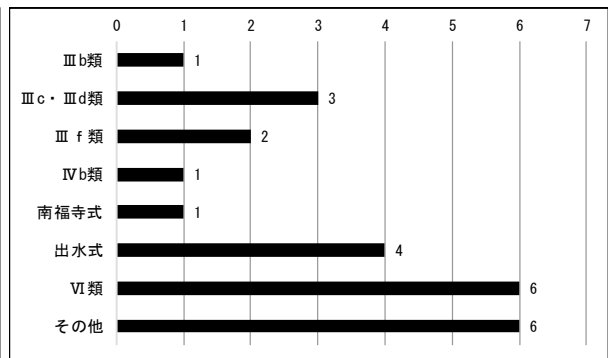
22 10次調査4T 総数3点



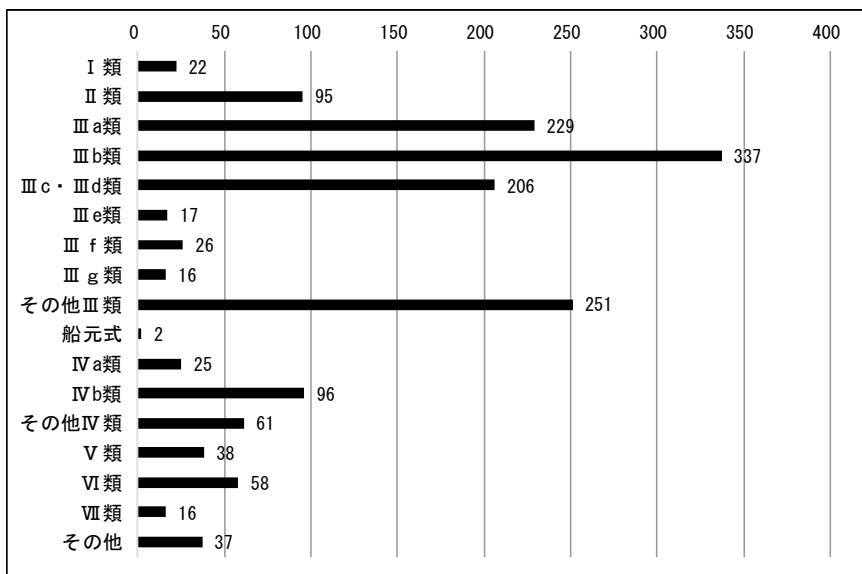
23 7次調査2T 総数37点



24 西岡台貝塚5T 総数54点



25 西岡台貝塚9T 総数24点



轟貝塚6次・9～11次・12～13次調査 全体 総数1532点

第162図 調査区別 出土土器型式4

単純な破片数によるものである点から、必ずしも正確な比較にならないことは承知の上である。それでも、攪乱層を含めた調査区全体の出土遺物を集計することで、ある程度の傾向はつかめるものと考え、ここに掲載する。

検討結果としてまず目につくのは、台地先端部に近い地点1～4で、Ⅲ類、特にⅢa・Ⅲb類（轟A式・B式）が突出して多いことである。これらの地点は出土遺物の総数も群を抜いて多く、傾向を比較的正しく反映しているとみられる。ただし地点1・2でⅢa類・Ⅲb類がどちらも多いのに対し、地点3・4ではⅢa類が少ない点は、地点3・4はⅡ類～Ⅲa類の時期にあたる基本層序Ⅳb層まで掘り下げていないことによるとみられ、注意が必要である。

地点6では、隣接する地点2と同様にⅢ類が優占するが、Ⅲa・Ⅲb類に対しⅢc・Ⅲd類（轟C・D式）が僅差ながらこれを上回る点が注目される。地点7でも同じ傾向が現れ、さらに地点9～13・15でより大きな差となる。地点1～4に特に集中するⅢa・Ⅲb類に対し、地点6から北西方向の一带をⅢc・Ⅲd類のピークとみることができる。第1節で示した轟C・D式を含む前期の貝層の堆積範囲（第157図）に正に隣接するあり方を示しており、遺構こそほとんど発見されていないが、このエリアを当該期の居住域と推定するひとつの根拠となろう。

同様に、地点7～15にかけてはⅣ類、特にⅣb類（阿高式）の出土が目立つ。これもまた阿高式を含む中期の貝層の推定堆積範囲に隣接したあり方といえ、当該期の居住域と推定し得る。出土数が少なく、あくまで参考程度だが、やや離れた地点14でもⅣb類が高い割合で出土している点を考慮すれば、居住域はより広範囲に広がる可能性も考えられる。

地点15～17にかけては、ここまでほとんどみられなかったⅤ類（市来式ほか）・Ⅵ類（磨消縄文系土器群、鐘崎式ほか）が急激に増加する。地点16でこれらを含む後期の貝層が検出され、現状ではその範囲を推定しきれていないが、この集計結果により、地点15～17付近の一带を貝層・居住域を含め後期に土地利用されたエリアと推定できる。

台地北側低地部の調査である地点18～20は、いずれも出土数自体がごくわずかであるため統計上はほとんど意味をなさないが、そのわずかに出土している土器がⅥ類・Ⅶ類（黒色磨研土器群、御領式ほか）である点のみ注意したい。

貝塚の北西側微高地上にあたる地点21・22もほぼ同様で、他の微高地上の調査ではそもそも縄文土器が発見されていない。これにより、遺物の出土していない帯は遺跡の範囲外と捉えて差し支えないと考えられる。

西岡台貝塚の調査である地点24・25は、船元式や出水式、Ⅵ類等が目立ち、中期と後期において他と様相が異なる。また、出土数自体が特に多い訳ではないが、総数に対するⅢf類（曾畑式）の割合もやや高い。近い傾向は両貝塚の中間にあたる地点23でも認められ、西岡台貝塚側からの流れ込みがあるとみられる。

出土土器全体の集計を通じて、遺物自体は早期～後期にかけてほぼまんべんなく出土しているが、その数量には大きな差があることが指摘できる。数量の多いものをみると、Ⅲb類、Ⅲa類、Ⅲc・Ⅲd類と、上位3つを轟式土器が独占する。これに細分不能な「その他Ⅲ類」を加えると、出土総数の約67%に上り、全体の出土数の中で轟式土器がいかに優占しているかがわかる。一方で、時期としてはⅢb類とⅢc・Ⅲd類との間に位置づけられるⅢf類（曾畑式）は全体の1.7%と、ごく少数である点が注目される。直接比較すれば、Ⅲf類の出土数はⅢb類の1/13、Ⅲc・Ⅲd類の1/8であるから、曾畑式土器の出土がいかに低調であるかが理解できよう。

また、第6次調査をはじめ、調査地点によっては多量に出土した感のあるⅣb類（阿高式）も、全体として特別多いとは言えず、総数の約6%、Ⅳ類全体を合計しても約12%にとどまる。前述のとおり、貝塚が立



地する台地の南西端部から中央部にかけて出土が集中し、当該期の貝層と居住域が想定できるが、言い換えれば、この範囲に比較的集中して出土するものであり、台地先端部や北西側微高地上にはほとんど分布していない。

V類・VI類をはじめとした後期の土器は、前期のⅢ類と対照的に、台地の先端付近にはほとんど無く、北西側の微高地上を中心に分布している。また、数量はごくわずかだが、台地北側の低地部等にも少量分布している。低地部で出土したものは台地上から流れ込んだ二次堆積の可能性が高いが、付近に本当に当該期の遺物包含層が存在しないのかは今後の検討課題である。

後期の土器の出土数が前期に比べ少ないのは、調査地点の偏りによる可能性があるが、やはり甕式土器の出土数は全体の中で突出して多い。甕B式土器の出土のピークである褐色土層（12・13次調査IV b層）には多量の獣骨・魚骨等の動物遺存体が含まれ、また集石遺構や焼土坑等、これまでの調査で確認された遺構も多い。これらの事実により、甕貝塚における人間活動のピークは甕式を中心とした縄文時代前期にあるといえる。そしてその痕跡が、前後の時期との層位的な上下関係、平面的な中心部の移動と共に把握された点は、名実ともに甕式土器の標式遺跡と呼ぶにふさわしいと考える。

## 石器組成と変化

時期を追って石器の器種構成や数量にどのような変化がみられるか。それを検討するため、第12・13次調査で出土した石器・石製品を層位ごとに集計したのが第163図である。

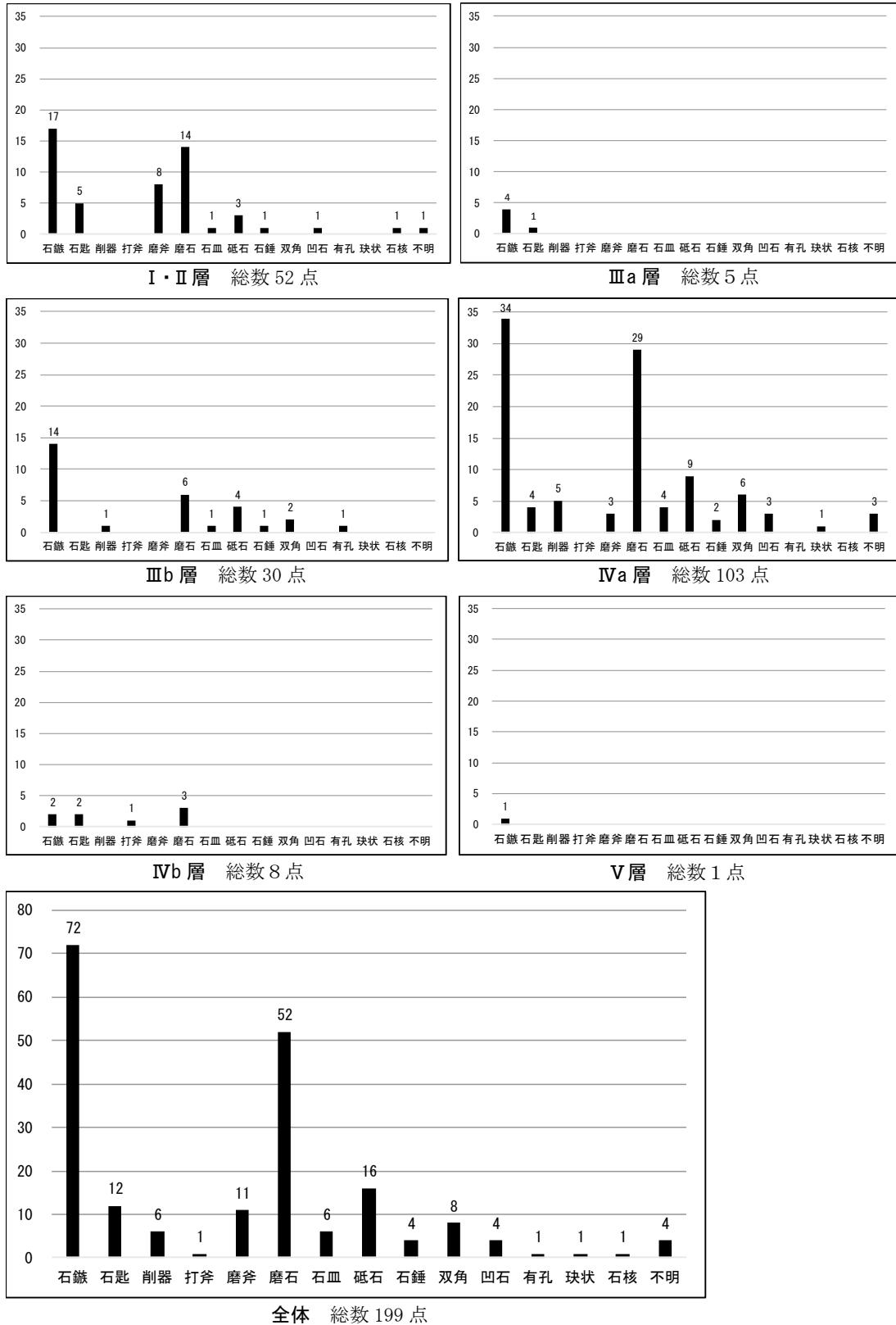
まず全体について、含まれる器種には狩猟具（石鏃）、漁撈具（石錘・双角状礫器）、製粉・加工具（磨石・敲石・石皿・石匙・削器・砥石等）、伐採又は土掘り具（石斧）等、様々な生業形態に対応した道具がみられる。また、他に有孔石製品（垂飾か）や球状耳飾り等、装身具とみられるものも少数ながら含まれる。数量についてみると、石鏃と磨石・敲石が圧倒的に多く、砥石、石匙、磨製石斧、双角状礫器がこれに次ぐ。

次に、時期（層位）を追って出土数や器種構成がどう推移するかを見てみる。最も古いV層では、石鏃が1点出土したのみで、包含層に含まれる石器そのものが少ない様子である。続くIV b層では、石鏃に加え石匙・磨石・打製石斧が少数ながら含まれる。そして、IV a層になると器種や数量が爆発的に増える。数は出土した石器全体の約52%を占め、器種も全体で出土しているものをほぼ全て網羅している。ところが貝層であるⅢ b層になると数量が減少し、比較的幅広い器種を含みながらも、出土数は全体の約15%、IV a層に対しおよそ1/3となる。Ⅲ a層ではさらに少なくなり、石鏃と石匙がわずかに出土したのみである。

以上により、甕貝塚で石器がある程度安定的に出土するのは縄文時代早期末葉（塞ノ神式・甕A式）とみられるIV b層以降で、その後、前期前葉（甕B式）を中心とするIV a層で器種・数量が急激に増え、貝層が形成される前期後葉（甕C・D式）以降は出土数が減少すると言える。全層を通じて出土するのは石鏃のみで、他に石匙・磨石がIV b層以上で比較的多く出土する。削器、磨製石斧、石錘や、貝の採取等に用いたと推定される双角状礫器等、多くのものはIV a層～Ⅲ b層にかけて出土し、Ⅲ a層ではみられない。

IV a層に石器の出土が集中するのは疑いようのない事実であり、この結果は土器の出土量のピークとも連動する。しかし、続くⅢ b層・Ⅲ a層で出土数が減少する点を時期差と捉えることについては慎重であるべきである。Ⅲ b層・Ⅲ a層はあくまでも貝層であり、狭義には生活面ではなく廃棄場所である。よって、ここに含まれる石器はある程度意図的に投棄されたものが主であるとみられ、当該期に使用していた道具が網羅的に堆積する性格のものではない。よって、生活面そのものであるIV a層と同列に比較するためには、貝層が形成されたとみられる前期後葉～中期の貝層でない堆積層が必要である。しかし、現状ではそれにあたる遺物包含層は確認されていない<sup>8)</sup>。

第3節 遺跡の変遷



【グラフ註】  
 打斧・磨斧はそれぞれ打製石斧・磨製石斧を指す。  
 磨石は敲石を兼ねるものが多いため、両者の合計を示す。  
 双角は双角状礫器を指す。  
 有孔は有孔石製品を指す。  
 玦状は玦状耳飾りを指す。

第163図 第12・13次調査 層位別石器出土数

### 轟貝塚における時期区分（第164～166図）

これまでの調査成果から、遺跡の時期は以下の6期に区分できる。時期の指標とした土器の分類や基本層序は第4章に準拠する。

- I期** 縄文時代早期。土器はI類（押型文土器）を伴う。単独の遺物包含層や当該期の遺構は未発見で、遺物も土器片が少量出土する程度である。遺物の出土は、この時期に土地の利用があったことを示しているが、その詳細は不明である。
- II期** 早期末葉。土器はII類（貝殻文系土器群）・III a類（轟A式土器）を伴い、基本層序V層～IV b層がこの時期の堆積層にあたる。遺構は土壇墓（13次調査1～4号人骨）や集石遺構（12次調査2 T）が確認されているほか、年代測定により早期末頃と推定された第2次調査1号・18号人骨も当該期の土壇墓と認識できる（山田・日下・米田2019）。発見されている遺構・遺物ともに台地先端付近に集中しており、一帯が墓域や生活の場として利用されたことがうかがえる。
- III期** 前期前葉。土器はIII b類（轟B式土器）が該当する。基本層序IV a層を中心に、土器・石器を問わず多量の遺物が出土する。またIV a層中には獣骨・魚骨等の動物遺存体が多く含まれ、台地先端の広い範囲で集石遺構が検出されることと併せ、活発な生業活動の痕跡がうかがえる。2次調査6号・17号人骨は年代測定により、この時期に属すと考えられる（山田・日下・米田2019）。このIII期から続くIV期にかけて、最も多くの遺物が出土していることから、轟貝塚における人間活動のピークと位置付けられる。隣接する西岡台貝塚では、およそこの時期から土地の利用が始まるとみられる。
- IV期** 前期中葉～後葉。土器はIII c類・III d類（轟C・D式土器）が該当し、IV a層～III b層にかけて多く出土する。III b層は貝層であり、轟貝塚において最初に貝層が形成された時期といえる。貝層はハイガイ・マガキ・ハマグリが優占し、その他イノシシ・シカをはじめとした獣骨や、クロダイ属、エイ・サメ類等の魚骨を多く含む。貝層の直下では土壇墓（13次調査5号人骨）が確認されており、他に2次調査2号・5号人骨も年代測定により同時期と推定される<sup>9)</sup>。また、同じく貝層下で貝殻廃棄土坑（13次調査8 T SK02・03）等の遺構も検出されており、土坑を用いた点的な廃棄から広範囲の貝層形成への変化がみられる。なお、III期との間には若干の空白期が想定され、この時期にあたるIII f類土器（曾畑式土器）は周辺の西岡台貝塚や馬場遺跡で確認されている。一時的に土地利用の中心が他所に遷り、轟貝塚における活動が低調になった可能性が指摘できる。
- V期** 中期後葉～後期前葉。土器はIV b類（阿高式）を中心とするIV類が該当する。基本層序はIII a層で、台地の南～南西側斜面を中心とした広い範囲に、IV期とは異なるマガキを主体とする貝層が形成された。貝層はIV期と同じく獣骨・魚骨を多く含むが、魚骨については特に、一定の外洋性種を含んでいたIII期・IV期の状況に対し、クロダイ属・スズキ属等の内湾性種が卓越し、若干の漁場の変化がうかがえる。現在のところ、2次調査4号人骨が年代測定の結果この時期にあたりとみられる以外に遺構は把握されていない。しかし、貝層周辺に多くの遺物が集中することから、付近が居住域として利用された可能性は高いとみられる。IV期との間には時期的な開きがあり、中期前葉～中葉は遺跡の空白期と言える。およそこの時期に該当する船元式土器が隣接する西岡台貝塚で出土しており、この頃に土地利用の中心が西岡台貝塚に遷っていた可能性がある。
- VI期** 後期中葉～後葉。土器はV類（市来式系土器群）・VI類（磨消縄文系土器群 鐘崎式ほか）・VII類（黒色磨研土器群 御領式）が該当する。前期・中期の痕跡が多く残る台地先端部から見て北西側の微高地上に、マテガイ・アゲマキ等を主体とする貝層が形成された。遺構は土壇墓（6次調査5



I期の遺構は未発見。II期は複数の人骨（土壙墓）が台地先端に集中し、墓域が想定される。I期・II期また、やや離れた地点に集石が確認されている。

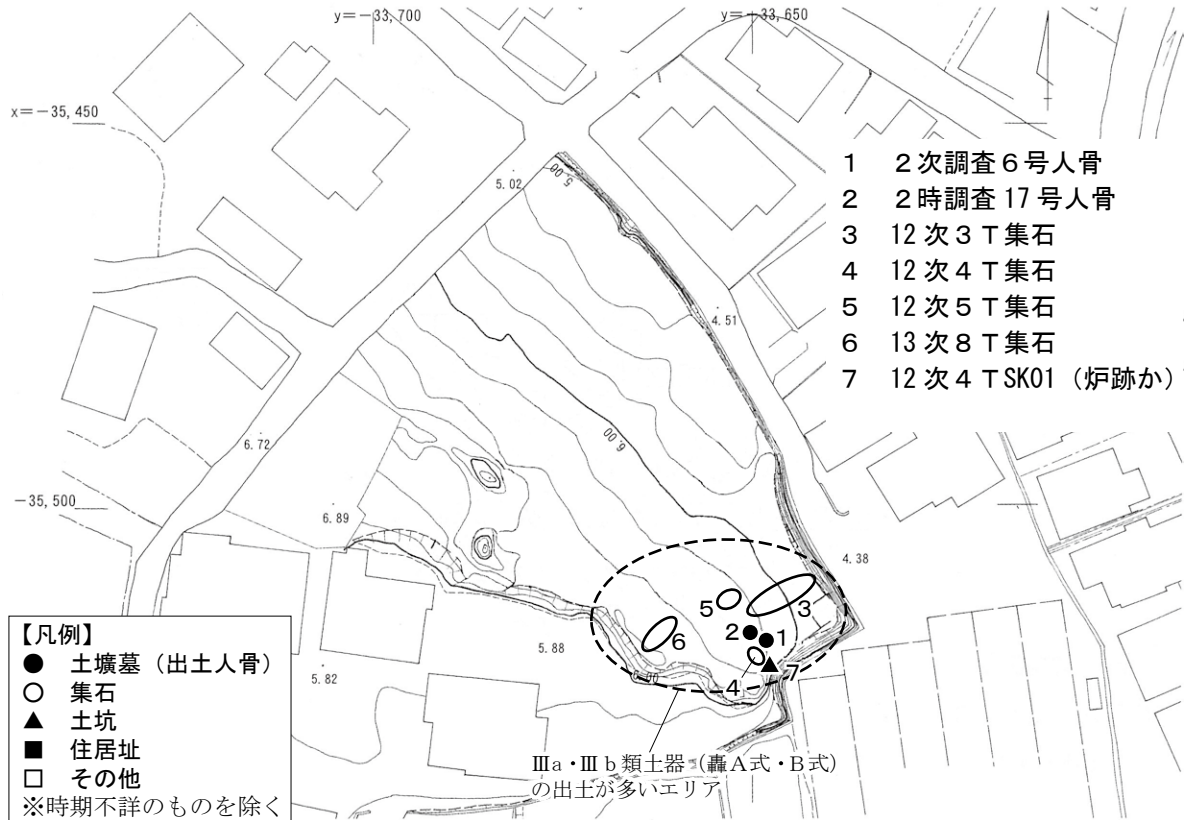
第164図 轟貝塚 時期別遺構分布1 (S=1/100)

号・8号人骨)と若干のピットが確認されている。また、5次調査Vbトレンチでは御領式の小児甕棺が、6次調査CT15グリッドでは御領式土器を伴う住居址が報告されており(松本・富樫1961,宇土市教育委員会2008),貝層が形成された微高地上を中心としながらも,比較的広範囲の土地利用があったことがうかがえる。

遺跡の変遷をまとめると以下のとおりである。

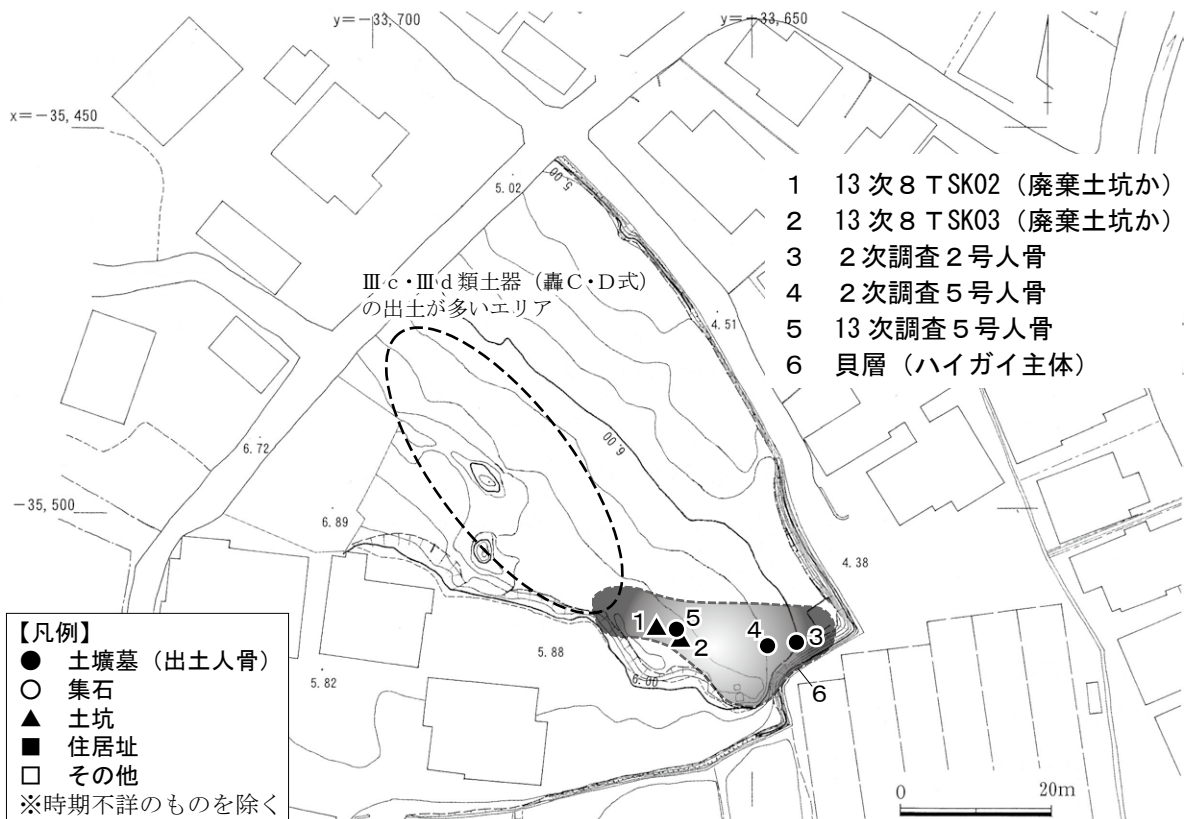
まず,遺跡のはじまりは縄文時代早期に求められ,特に土壙墓等明確な遺構が確認できるのは早期末頃(塞ノ神式~轟A式)からである。その後,南九州でみられるような鬼界アカホヤテフラ(K-Ah)による遺跡の断絶は特にみられず,前期前葉(轟B式)を中心に活発な生業活動の痕跡が認められる。前期中葉に若干の空白期が想定されるが,前期後葉(轟C・D式)には台地先端部を中心に,それまでの居住域を覆うようにハイガイ等を主体とする最初の貝層が形成される。遺物の分布状況から,この時期の居住域は貝層の北西側に隣接して存在すると推定される。その後,中期前葉~中葉の空白期を経て,中期後葉(阿高式)には台地の南西側斜面を中心にカキ主体の貝層が形成される。遺構は未発見だが,これも遺物の分布状況から,貝層付近~台地中央にかけて居住域が存在したとみられる。後期(市来式・鐘崎式・御領式ほか)には,遺跡の中心が北西側の微高地上に遷ったとみられ,ここにマテガイ・アゲマキ等を多く含む貝層と土壙墓をはじめとした遺構が分布する。ただし,台地先端付近でもわずかながら当該期の住居跡等が確認されており,微高地上に限らず比較的広い範囲で土地利用された可能性がある。その他,台地北側の低地部等にも遺物が若干分布している。

貝層や遺構・遺物の分布状況から総合的に判断して,轟貝塚における土地利用の中心は,早期末から後期にかけて,台地先端部から台地中央・西側斜面部を経て,北西側微高地上へと遷っていく様子がうかがえる。



- 1 2次調査6号人骨
- 2 2時調査17号人骨
- 3 12次3 T集石
- 4 12次4 T集石
- 5 12次5 T集石
- 6 13次8 T集石
- 7 12次4 TSK01 (炉跡か)

土壙墓・集石・廃棄土坑等、多くの遺構が台地先端部に集中する。併せて、当該期の遺物もほぼ同じエリアで多量出土している。

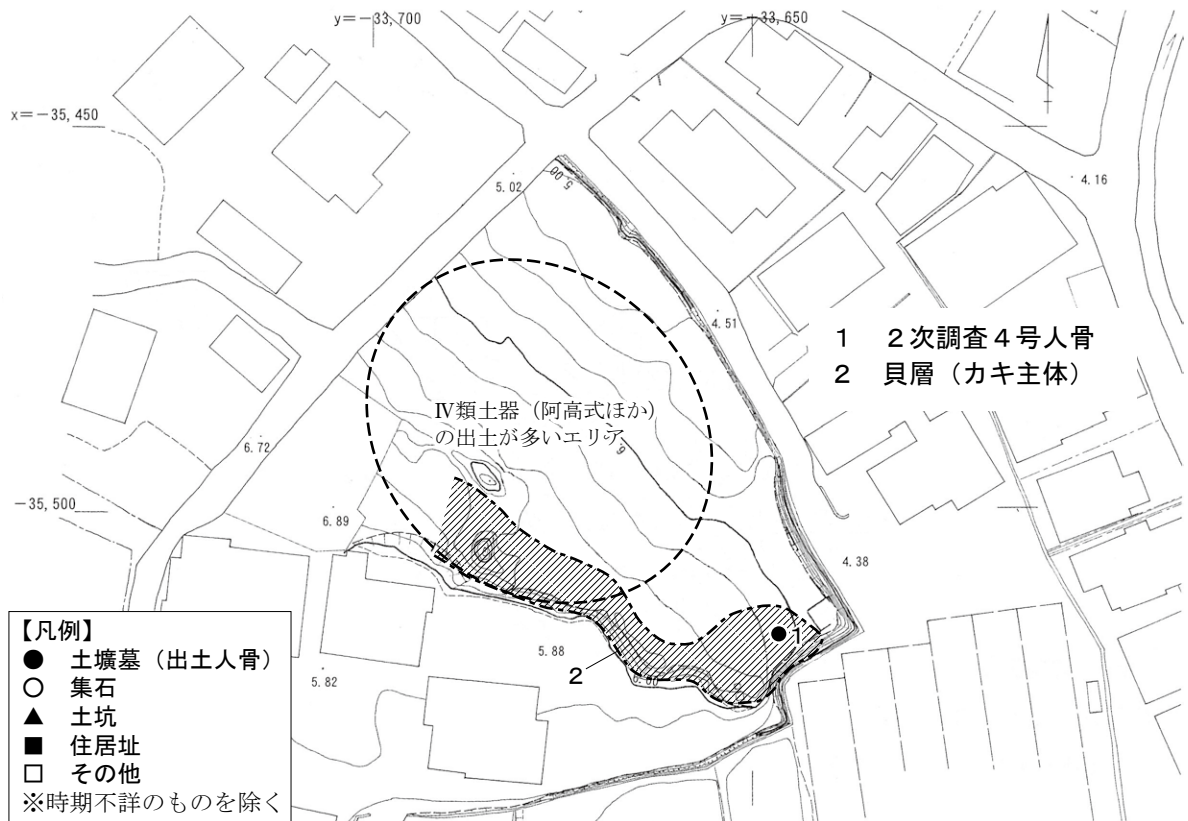


- 1 13次8 TSK02 (廃棄土坑か)
- 2 13次8 TSK03 (廃棄土坑か)
- 3 2次調査2号人骨
- 4 2次調査5号人骨
- 5 13次調査5号人骨
- 6 貝層 (ハイガイ主体)

台地先端付近に廃棄土坑や複数の土壙墓が形成された後、貝層の形成が始まる。土器の出土量からみて、貝層北西側の一帯に居住域が想定される。

第165図 轟貝塚 時期別遺構分布2 (S=1/100)





台地の南西側斜面を中心に広く貝層が形成される。V期  
年代測定によりこの時期に比定される1を除き、明確にこの時期に該当する遺構は把握されていない。



台地先端部から北西側の微高地上へと中心が遷る。貝層は、検出した地点が6次調査ETの1箇所のみであるため、その範囲については推定不能。最低限の範囲のみ示す。VI期

第166図 轟貝塚 時期別遺構分布3 (S=1/100)

## 第4節 轟貝塚の本質的価値について

### 貝層の形成時期

縄文時代早期末頃から遺跡の形成が始まるとみられる轟貝塚では、前期前葉にかけて貝の採取をはじめとした生業活動が活発化し、前期後葉には貝層が形成され始めたことが調査により判明した。また、その後は中期後葉～後期にも貝層が形成されたことがわかっている。

貝類の捕獲状況から九州の貝塚の発展段階を検討した山崎純男は、西北九州沿岸部、とりわけ有明海・不知火海沿岸には前期から多くの貝塚が形成される点を指摘し、早期に遡る東九州の一部事例を除き、九州における貝塚形成の開始・発展期を前期の曾畑式・轟式期に求めた（山崎 1975）。以降、近年までこの見方は大きく変わることなく、熊本県内では轟貝塚を含め9遺跡が前期の貝塚として集成されている（池田 2001）。しかし、その多くは出土遺物から前期とみられているものの、貝層の形成自体が前期であることが確かめられた事例は、宇土市曾畑貝塚をはじめごく一部である<sup>10)</sup>。むしろ前期の遺物のみ出土する例は少なく、多くの場合、前期と共に中期・後期の遺物も多数出土することから、実際には貝層の形成が中期以降という遺跡も含まれる可能性がある<sup>11)</sup>。

一方、有明海奥部の佐賀平野で発見された佐賀市東名遺跡は、調査の結果、早期の貝塚を含む集落遺跡であることが判明した（佐賀市教育委員会 2009 a）。これをきっかけに、いくつかの遺跡について、貝塚の形成が早期に遡る可能性が指摘されている（水ノ江 2012）。

このように、九州における貝塚形成の開始期の問題は、未だ修正・検討の必要がある。その中で、発掘調査の成果を以て、貝層の形成時期を改めて前期後葉と比定した轟貝塚の調査成果は、同貝塚に対する従来の時間的位置づけとも調和的で、これを確認できた点は有明海沿岸地域の貝塚遺跡を考える上できわめて重要なものといえる。

### 居住域の把握と集落構造

轟貝塚では、古くから繰り返し調査が行われてきた反面、貝層と土壙墓を除く各種遺構の検出が低調であり、居住域を含む集落遺跡としての全体構造はほとんど把握されていなかった。しかし本書で報告した第12・13次調査の結果、貝層の下から早期末～前期とみられる土壙墓、集石、土坑等を検出し、標式である轟式土器を含む早期末～前期の痕跡は、後に形成された貝層の下（一部貝層中）に存在することが明らかになった。貝層の形成が始まる前期後葉以後については遺構がほぼ未発見だが、前節で述べたとおり、これまでの調査による遺物の平面分布からおおよその居住域が推定できた。その結果は、貝層が形成された各時期の居住域は貝層堆積範囲に隣接して存在したとみて良いものであった。総じて、轟貝塚においては遺跡が立地する台地の先端付近から南西側斜面部付近を経て北西側の微高地上へと、早期末葉、前期前葉、前期後葉、中期後葉～後期前葉、後期中葉～後葉と、遺跡の中心が貝層と共に遷り変わる様子が明らかになった。

九州中西部に位置する熊本県は、豊かな内湾である有明海・不知火海（八代海）の存在を背景に、九州でも特に縄文時代の貝塚が多い地域である。しかしその中でも、貝塚に伴う居住域の存在や、それらを含めた集落構造について言及できる遺跡はごく限られている。集落遺跡について考える上で最も基本的な遺構と言える住居址について、九州縄文研究会による集成が行われているが、報告された事例の中で貝塚に伴うものは、熊本市渡鹿貝塚と、同じく阿高貝塚の2例のみである（師富 2008）。両者は共に後期に位置づけられるため、轟式をはじめとした前期の貝塚に伴う住居址の発見例は無いと言える<sup>12)</sup>。また住居址以外で、集落構造に関して多少なりとも所見が得られるものは、貝層と貯蔵穴群との位置関係が把握できる宇土市曾畑貝塚及び西岡台貝塚、熊本市黒橋貝塚、墓域との関係がわかる天草市沖ノ原貝塚等、少数である（池田 2001）。

なお、県外になるが同じ有明海に面する著名な事例として、佐賀県佐賀市の東名遺跡がある。ここでは大規模かつ緻密な調査・検討が行われ、貝塚・居住域・墓域・低湿地型貯蔵穴群を含む縄文時代早期後葉～末葉の集落構造が明らかにされている（佐賀市教育委員会 2016）。西日本でも最大級・最古級の発見として注目される。

こうした中であって、轟貝塚における上記の検討結果は、貝塚と居住域とのおよその位置関係を推定し、その変遷を描けた点で貴重な事例と言える。時期の上では、東名遺跡が廃絶する早期末葉から土地の利用が始まったとみられる点や、遺跡数自体が少ない前期にかけ活動のピークを迎える点等、前期の集落構造を考える好資料となる。また、東名遺跡廃絶の背景として、早期末葉に温暖化による急激な海進が起こったとされる点を考慮すれば、同じ有明海に面する轟貝塚周辺においても、海進の影響は少なからずあったと考えられる。やや想像をたくましくすれば、轟貝塚周辺の低地部には未発見の早期集落が存在し、海進の影響で移動を余儀なくされたことが、轟貝塚における土地利用開始の背景であった可能性も考えられる。現在、轟貝塚の付近には日本名水百選に数えられる湧水「轟水源」が存在するが、縄文時代にもこの付近に湧水地があったと仮定すれば、海の幸・山の幸・飲料水に恵まれたこの地が生活の場として選ばれたのは自然なことと言える。

#### 豊富な人骨資料

轟貝塚においては、これまでの調査により計69体にのぼる縄文時代人骨（推定含む）が出土・採集されている。特に初期の調査は、明治期から大正期における「石器時代人論争」を背景に、石器時代人骨資料の収集を主目的に行われた側面が指摘でき（第2章参照）、濱田耕作・清野謙次・長谷部言人ら調査者の名前と共に、学史的に非常に重要なものである。しかし、これらの調査で出土した人骨資料は、報告された検出位置の記録だけでは帰属する層位・時期が正確に絞り込めない等の問題があり、その価値付けが困難であったが、近年、山田康弘らのグループが轟貝塚第2次調査で出土した人骨の一部について年代測定を実施し、早期末葉から後期まで、幅広い時期のものが含まれることを明らかにした（山田・日下・米田 2019）。

また、本書で示した第13次調査においても計5体の人骨が出土し、轟貝塚出土人骨の中では初めて、層位的に早期末葉と前期中葉～後葉に位置づけられた。これらについては年代測定も実施しており、1・3・4号人骨については第7章3節に、5号人骨については第4章5節に結果を示した。それによれば、1～4号人骨は早期末葉～前期初頭に、5号人骨は前期後葉にそれぞれ位置付けて大過ないものとみられ、出土層位からみた所見と矛盾しない。

全体として、貝塚が立地する台地の先端付近には、一部に後期の人骨も含むものの、早期末から前期にかけての人骨が集中的に出土しており（第158図）、この一帯に一定の墓域を想定することが可能である。未だ時期が不明な出土人骨も多くあるが、これらは京都大学や東京大学、長崎大学において良好な状態で保管されており、今後、年代測定をはじめとした分析が進めば、より詳細な検討が可能になる。

熊本県内の縄文時代人骨の出土例は、第4章5節に示すように、9遺跡程度が知られる。この内、貝塚遺跡は轟貝塚の他に曾畑貝塚、阿高貝塚、御領貝塚、カキワラ貝塚、七ツ江カキワラ貝塚、沖ノ原貝塚の6遺跡である。正確な時期が不明なものも多く含むが<sup>13)</sup>、現状で早期まで遡るとされる例はない。このことから、轟貝塚出土人骨の古さと稀少性が指摘でき、同じく早期に位置づけられる佐賀県佐賀市東名遺跡出土人骨と併せ、海浜部を主な生活圏とした早期縄文人に関する貴重な資料と言える。

古くから様々な研究者が調査を行ってきた轟貝塚では、人骨を含めた出土遺物の多くは各調査者（調査機関）が持ち帰り、現在まで保管している（付編1参照）。よって、数多く出土した人骨資料を一堂に会して比較・検討することは困難だが、本書執筆にあたって宇土市教育委員会で実施した資料調査により、それぞれの所



在や保管状況等が概ね確認できた。一遺跡の、それも直径数十mの限られた範囲から集中して出土している点、そして早期末から後期まで幅広い時期のものが含まれる点を考慮すれば、早期末～後期の縄文時代人について、形質の特徴、遺伝情報、食性その他の生活環境等を同一の遺跡内で比較・検討し得る良好な資料群と言える。

また、新規掘削部分のごく限られている第13次調査でも複数出土した点から、現地には未だ多数の人骨（土壙墓）が遺存していると予想される。

### 轟式土器の標式遺跡

「轟式土器」の名称は、小林久雄がこれを用いて以来（小林1935）、九州における縄文土器型式のひとつとして広く浸透してきた。その時期については、多くの細分類（松本・富樫1961、高橋1989ほか）や鬼界アカホヤ火山灰を鍵層とした層位的な位置づけ等を経て（新東1978、栗畑2013）、いわゆる轟A式は早期末葉に、轟B式は前期前半に、轟C・D式は曾畑式土器以降の前期中葉～後葉に位置づけられている（栗畑2008）。

縄文時代早期と前期を区分する重要な指標となる鬼界アカホヤ火山灰の降下は、年代で言えば今から約7300年前、土器型式で言えば高橋信武編年における轟2式と3式の間、栗畑光博編年では轟A式とB式1段階との間に位置づけられる西之菌式の時期に起こったとされる（高橋2014、栗畑2016）。しかし、間にアカホヤの降下を挟みつつも、早期末葉から前期への文化の流れは途切れることなく連続的に変遷したと考えられ（水ノ江2012）、その根拠として重要な位置を占めるのが轟A式からB式への、無理のないスムーズな型式変化である<sup>14)</sup>。

このように、轟式土器の存在は九州の縄文時代早期末～前期における文化の継続・断絶に関する重要な手がかりを含んでおり、単純な年代の物差しとして以上の価値を内包するものとして重要である。

そして轟貝塚では、大正期から現在まで、計13次にわたる発掘調査の中で、縄文時代早期～後期の様々な土器が出土している。その様相は、県内における縄文時代の主要な土器型式を半ば網羅的に含み、特に早期末～前期にかけては、前節で示したとおり、轟式を中心に数量も飛びぬけて多い。これらが層位的な上下関係を以て把握でき、第7章2節で示したアカホヤとの関係等も含めて把握できる点は、正に轟式土器の標式遺跡と呼ぶにふさわしい。轟式土器自体の学問的重要性と併せ、遺跡の重要性の中核をなすものである。

以上、轟貝塚が内包する本質的価値について、4項目に分けて述べた。そのいずれも、西日本有数の貝塚密集地域である有明海沿岸部にあつて、特に価値の高い要素であることは述べたとおりである。加えて、轟貝塚の現地は、現在も多量の貝殻の散布が確認できる良好な保存状態を保っており、未調査部分の地下には未だ多くの遺構・遺物が眠っていると予想される。これを適切に保存して将来の研究に資することはもちろん、学史も含めたその価値を、地域史の中の重要な一端を担うものとして、広く一般に公開し、活用を図ることは行政に課せられた使命と考える。

### 註

- 1) 第6次調査ではこの他に、縄文時代以外の遺構として中世のものとみられる土壙墓と横堀跡が検出されている。
- 2) 第3次調査は、東京大学総合研究博物館に所蔵されている人骨数（海部・中橋・橋本1998）。第6次調査は、中世とみられる4号人骨を除く。
- 3) 貝層の下から出土したとされるものでも、仮に貝層上部から掘り込んだ墓壙が存在していれば、貝層より新しいことになる。一部を除き過去の調査記録ではこの点に触れられていないため、出土した人骨の埋葬姿勢（屈葬）から縄文時代とみられるが、現状では時期不明が大半となっている。ただし、近年実施された第2次調査出土人骨の年代測

#### 第4節 轟貝塚の本質的価値について

定結果から、貝層下出土とされたものは早期から前期が多く、貝層中とされたものには後期のものを含むことが判明しており（山田・日下・米田 2019）、人骨の出土位置の層位と年代が一定程度対応しているとみられる。

4) 13次調査5号人骨は前期の貝層の直下から墓壇の落ち込みが確認できたことから、これに先立つ前期中葉～後葉の土壇墓と判断される。一方、1～4号人骨は明確な墓壇が検出できなかったが、人骨の直上に集石遺構とみられる多量の礫が分布し、礫による不均等な圧力により2号人骨の大腿部等が折損していた点等からみて、集石遺構に先行する遺構であると判断した。集石を検出したIV a層が前期前葉の堆積層とみられることから、人骨の時期はこれに先行する早期末葉頃と推定した。

5) 京都帝大が実施した第2次調査では、墓壇の検出層位でなく、人骨そのものの出土位置で示されているため、帰属する時期を層位から本来決定することはできない。しかしながら、年代分析の結果から判断すれば、一部を除き人骨が出土層位と分析で得られた年代に相関関係があることが指摘できる。このことは、清野謙次が「発掘が進みて貝層が特に尽きんとする頃に、骨格の一部が（多くの場合に於いて膝関節部又は頭蓋骨）が現はるゝを常とせり」という詳細な記述から当時においても層位的な調査が意識されていたとみられることから、人骨の出土位置（土層）が人骨の相対的な年代をある程度反映しているとみられる。

なお、2次調査9号から15号人骨は、報告書において「四肢骨の何れに属せりや不明瞭なるもの多し、骨骼研究時には一括して示す可し」と記載するほど近接している（濱田・榊原・清野 1920）。このうち、第2次調査の9号人骨は、地表面から「一尺五寸」で「貝層下に存す」と記載されているのに対し、10号から15号は地表面から「二尺」と9号人骨より深い位置から出土しているにもかかわらず、9号より上層の「貝層最下部から有機質土」層中より出土と報告されていることから、記載内容が誤り（「貝層下」ではなく「貝層内」）である可能性がある。

6) 熊本県教育委員会による曾畑低湿地遺跡の報告（熊本県教育委員会 1988）では、曾畑貝塚西側の低地部まで入り込み、砂嘴や台地に囲まれた穏やかな内湾を形成したとみられる海進期の内湾を「曾畑ラグーン」と呼称している。

7) 同様の事例として近年著名なものに、佐賀県佐賀市の東名遺跡がある（佐賀市教育委員会 2016）。ここでは低地部の貯蔵穴群、微高地上の居住域と、その間の斜面部に形成された貝塚との関係が丁寧に把握されている。

8) 貝層であるIII b・III a層の上部は中世以降の攪乱を伴う混貝土層を経て耕作土である表土に続く。一方、IV a層からは貝層の形成時期としている轟C・D式土器にあたるものも出土しており、地点によって貝層形成時期と併行する生活面を含んでいる可能性はある。

9) この他に、腹部から発見された食物残渣で知られる第6次調査1号人骨や、多数の貝玉を伴う同2号人骨等、貝層下の褐色土層に掘り込まれた土壇墓は多数存在するが、過去の調査記録からだけではIII期かIV期かの区別がつけられないため、ここでは明記していない。年代測定をはじめ今後の分析・研究によりいずれ明らかになることを期待したい。

10) 曾畑貝塚では、東西ふたつの貝塚が確認された内の西貝塚で、曾畑式土器を単純に包含する貝層が確認されている（宇土市教育委員会 2011）。その他、平成2（1990）年に発見された佐賀県佐賀市東名遺跡では、その後の調査で早期後葉～末葉に貝層が形成されたことが判明し、九州最古級と位置付けられる（佐賀市教育委員会 2016）。

11) 轟貝塚においても、第6次調査の再整理のため、慶応大学から宇土市教育委員会へ移管された図面・日誌等の記録資料や出土遺物からは、轟式期の貝層の存在がはっきりしなかったことから、第12次調査実施までは貝層の形成は中期・阿高式期である可能性が高いとみていた（宇土市教育委員会 2008）。

12) ただし、住居址が検出されないことと、貝塚付近に居住域が存在しないことは必ずしもイコールではない。貝層中に多く含まれる獣骨や魚骨等貝類以外の食物残滓や、豊富に出土する土器・石器等の遺物から、当該貝塚が貝の採取と処理のみを専門的に行った作業場ではなく、近くに居住域があったと推定することは可能である。また、竪穴住居が検出されない背景には、掘立柱建物を住居とした可能性も考慮すべきとの意見がある（水ノ江 2012）。

13) 例えば、1916（大正5）年に阿高貝塚で行われた調査では「50余体」の人骨が出土したとされるが、その出土位置は貝層中や貝層下の地山等と記録され、貝層が形成された時期と必ずしも一致しないとみられる。近接する黒橋貝塚

で後世の人骨が多数出土したことも考慮し、時期については明確にできないとされる（熊本県教育委員会 2005）。

- 14) こうした考えは比較的近年のもので、広域テフラである鬼界アカホヤ火山灰が認識された1980年代以降、南九州における早期縄文文化はアカホヤによる壊滅的な被害を受けて断絶し、それ以前の塞ノ神式等と型的に連続しない曾畑式・轟式土器を伴う集団が、新たに南九州に進出して前期以降の縄文文化が形成されていったとする考えが広く受け入れられてきた。

## 引用・参考文献

- 天草市教育委員会 2007『大矢遺跡』天草市文化財調査報告書第1集
- 池田朋生 2001「熊本県の貝塚の様相」『九州の貝塚』第11回九州縄文研究会熊本大会 九州縄文研究会
- 池田朋生 2002「轟貝塚」『新宇土市史』資料編第2巻 宇土市
- 池田朋生 2008「住居址からみた定住化の様相（石の本遺跡群の縄文後晩期の集落構造から）」『九州の縄文住居』II 第18回九州縄文研究会熊本大会 九州縄文研究会
- 上田典男 1983「縄文時代焼礫集積遺構の形態的把握」『物質文化』41号 物質文化研究会
- 宇土市教育委員会 1977『宇土城跡（西岡台）』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集
- 宇土市教育委員会 1985『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集
- 宇土市教育委員会 2005『轟貝塚・馬門石石切場跡—宇土市内遺跡範囲確認調査概報—』宇土市埋蔵文化財調査報告書第27集
- 宇土市教育委員会 2006『轟貝塚 馬門石石切場跡』宇土市埋蔵文化財調査報告書第28集
- 宇土市教育委員会 2008『轟貝塚—慶應義塾大学資料再整理報告書—』宇土市埋蔵文化財調査報告書第30集
- 宇土市教育委員会 2011『曾畑貝塚—慶應義塾大学資料再整理報告書—』宇土市埋蔵文化財調査報告書第32集
- 宇土市教育委員会 2017『轟貝塚』II 宇土市埋蔵文化財調査報告書第36集
- 江坂輝彌 1966「縄文土器—九州編〔3〕」『考古学ジャーナル』3号
- 江坂輝彌 1971「熊本県宇土市轟貝塚」『日本考古学年報』19 日本考古学協会
- 遠藤邦彦・鈴木正章 1980「立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス農集層」『考古学と自然科学』13
- 大矢京右 2017「児玉コレクションの収集経過とその周辺」『市立函館博物館研究紀要』第27号 市立函館博物館
- 川口雅之 2001「石ノ瀬遺跡」『考古』新宇土市史基礎資料集第9集 宇土市教育委員会
- 海部陽介・中橋孝博・橋本裕子 1998「九州地方出土縄文時代人骨の形態学的特徴—東京大学総合研究博物館所蔵標本資料について—」『国立科学博物館専報』第30巻 国立科学博物館
- 木崎康弘 2015「佐藤傳蔵と黎明期の九州考古学—井寺古墳装飾と轟貝塚等の発見の意味を問う—」『高野晋司氏追悼論文集』高野晋司氏追悼論文集刊行会
- 木崎康弘 2017『肥後と球磨 その原史世界に魅せられし人々—肥後と球磨の考古学史— 人吉中央出版社
- 九州縄文研究会編 2001『九州の貝塚』第11回九州縄文研究会熊本大会 九州縄文研究会・肥後考古学会
- 九州縄文研究会編 2003『九州縄文時代の集石遺構と炉穴—発表要旨・資料集—』第13回九州縄文研究会宮崎大会 九州縄文研究会 宮崎考古学会
- 九州縄文研究会編 2008『九州の縄文住居』II 第18回九州縄文研究会熊本大会 九州縄文研究会
- 九州日日新聞社 1917a「宇土轟の貝塚発掘」『九州日日新聞』大正6年5月31日付け
- 九州日日新聞社 1917b「轟の貝塚」『九州日日新聞』大正6年6月30日付け
- 九州日日新聞社 1919「轟貝塚調査の成績」『九州日日新聞』大正8年12月27日付け
- 九州日日新聞社 1930a「三班に分れて調査 / 鳥居博士豊田地方調査」『九州日日新聞』昭和5年3月29日付け
- 九州日日新聞社 1930b「考古学より見たる肥後の遺跡に就いて」（上）『九州日日新聞』昭和5年3月31日付け

#### 第4節 轟貝塚の本質的価値について

- 清野謙次 1922 「考古漫録」『民族と歴史』7-3 民族と歴史編輯所
- 清野謙次 1925 『日本原人の研究』岡書院
- 工藤雅樹 1987 「日本人種・民族論」『論争・学説 日本の考古学』第1巻 総論 雄山閣出版
- 倉元慎平 2014 「轟B式土器最新段階についての一考察」『先史・考古学論究』VI 熊本大学考古学研究室創立40周年記念論文集 龍田考古会
- 熊本県教育委員会 1988 『曾畑—熊本県宇土市花園町 曾畑貝塚・低湿地の調査—』熊本県文化財調査報告第100集
- 熊本県教育委員会 1994 『熊本県遺跡地図』
- 熊本県教育委員会 1998 『黒橋貝塚』熊本県文化財調査報告第166集
- 熊本県教育委員会 2005 『阿高貝塚』熊本県文化財調査報告第223集
- 熊本日日新聞社 1958 「轟貝塚（宇土）を再び発掘」『熊本日日新聞』昭和33年7月25日付け
- 栗畑光博 2008 「轟式土器」小林達雄編『総覧 縄文土器』総覧 縄文土器刊行委員会
- 栗畑光博 2013 「鬼界アカホヤテフラ（K-Ah）の年代と九州縄文土器編年との対応関係」『第四紀研究』52（4）日本第四紀学会
- 栗畑光博 2016 『超巨大噴火が人類に与えた影響—西南日本で起こった鬼界アカホヤ噴火を中心として—』雄山閣
- 小林久雄 1930 「益宇三郡の貝塚に就いて」『九州日日新聞』昭和5年12月7・9・11日（小林久雄 1967『九州縄文土器の研究』に再録）
- 小林久雄 1931 「阿高貝塚及び御領貝塚の土器について」『地歴研究』7-3~8 熊本地歴研究会
- 小林久雄 1935 「肥後縄文土器編年の概要」『考古学評論』第1巻第2号 東京考古学会
- 小林久雄 1939 「九州の縄文土器」『人類学先史学講座』11 雄山閣
- 小林久雄 1967 『九州縄文土器の研究』雄山閣
- 斎藤忠 2004 『改訂新版 日本考古学用語辞典』学生社
- 佐賀市教育委員会 2009 a 『東名遺跡群Ⅰ 東名遺跡Ⅰ区—縄文早期遺跡の調査—』佐賀市文化財調査報告書第150集
- 佐賀市教育委員会 2009 b 『東名遺跡群Ⅱ—東名異性2次・久富二本杉遺跡—』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第40集
- 佐賀市教育委員会 2016 『東名遺跡群Ⅳ—東名遺跡群総括報告書—』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第100集
- 坂本経堯 1983 「轟貝塚」『肥後上代文化資料集成』肥後上代文化研究会
- 佐藤傳藏 1899 「九州における石器時代人民」『地学雑誌』11巻1号 東京地学協会
- 下村 智 2010 「九州出土の球状耳飾に関する基礎的検討」『先史学・考古学論究』V 龍田考古会
- 新東晃一 1978 「南九州の火山灰と土器型式」『どるめん』19号
- 新東晃一 1980 「火山灰から見た南九州縄文早・前期土器の様相」鏡山先生古稀記念論文集刊行会編『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』
- 鈴木文太郎 1918a 「肥後轟貝塚河内道明寺等にて発掘せる人骨に就いて」『人類学雑誌』第33巻第3号
- 鈴木文太郎 1918b 「河内国府人骨肥後轟貝塚にて発掘せる人骨について報じ併せて石器時代の住民に及ぶ」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第2冊
- 高橋信武 1989 「轟式土器再考」『考古学雑誌』75巻1号
- 高橋信武 2014 「アカホヤ直下の土器」『九州における縄文時代早期末～前期前葉の土器様相 発表要旨・資料集』第24回九州縄文研究会大分大会 九州縄文研究会
- 田中良之 1882 「曾畑式土器の展開」『末盧国』六興出版
- 谷口康浩 1986 「縄文時代『集石遺構』に関する試論—関東・中部地方における早・前・中期の焼礫集積遺構を中心として—」『東京考古』4 東京考古談話会
- 富樫卯三郎 1960 「古代文化の跡 轟貝塚の発掘」『宇土市史』

- 徳永貞紹 1990「九州の縄文時代集石遺構—研究の現状と課題—」『肥後考古』第7号 肥後考古学会
- 中川毅人 2001「轟貝塚出土の動物遺存体及び貝製品」『考古学研究室報告』第36集 熊本大学文学部考古学研究室
- 濱田耕作 1918「河内国府石器時代遺跡発掘報告」『京都帝国大学文科考古学研究报告』2
- 濱田耕作・榊原政職・清野謙次 1920「肥後轟貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究报告』第5冊
- 古森政次 2002「西岡台貝塚」『新宇土市史』資料編2 宇土市
- 古森政次・金田一精 2003「縄文時代」『新宇土市史』通史編第1巻 宇土市
- 町田洋・新井房夫 1978「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰」『第四紀研究』17巻3号
- 松本雅明 1958「轟貝塚の発掘」(上)・(下) 熊本日日新聞 昭和33年9月3日・4日号
- 松本雅明・富樫卯三郎 1961「轟式土器の編年—熊本県宇土市轟貝塚調査報告」『考古学雑誌』第47巻第3号  
日本考古学会
- 松本雅明 1967「肥後考古学会の成立前後」『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿刊行会
- 三森定男 1935「肥後轟貝塚の土器について—覚書—」『考古学』第6巻第2・5号
- 水ノ江和同 1990「中・南九州の曾畑式土器」『肥後考古』第7号 肥後考古学会
- 水ノ江和同 2012『九州縄文文化の研究—九州からみた縄文文化の枠組み—』雄山閣
- 宮本一夫 1990「轟B式土器の再検討—京都大学文学部博物館収蔵資料を中心に—」『肥後考古』第7号 肥後考古学会
- 師富国博 2008「熊本県の縄文時代竪穴住居」『九州の縄文住居』Ⅱ 第18回九州縄文研究会熊本大会 九州縄文研究会・肥後考古学会
- 山崎純男 1975「九州地方における貝塚研究の諸問題—特に自然遺物(貝類)について—」『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会
- 山田康弘・日下宗一郎・米田穰 2019「熊本県轟貝塚出土人骨の年代」『先史学・考古学論究』Ⅶ 考古学研究室創設45周年記念論文集 龍田考古会

